

文部科学省委託(平成27年度～29年度)  
多様な学習を支援する高等学校の推進事業

# 定時制・通信制課程における 生徒の自立を促す支援・相談体制の構築

～「自立支援プログラム」「地域連携プログラム」の作成と実践を通して～



## 太平洋学園高等学校

〒780-0061 高知市栄田町1丁目3番8号

Tel 088-822-3584

FAX 088-822-3585

## 理事長あいさつ

土居 正明

この事業は、文部科学省の「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」に、平成27年2月に応募して採用され、平成27年度よりスタートした3年間の事業です。

この事業は、本校がこれまで多様な生徒を受け入れ、その生徒達に高等学校で学ぶ機会を提供し、一人ひとりの学力向上と進路保障に向けて教育相談や学習支援などの分野を中心にきめ細やかな支援体制を作り上げてきたことを踏まえ、更なる生徒の成長と本校の前進を願い研究と実践を積み重ねてきたものです。

かねてより連携・ご協力を頂いてきた大学等の学識経験者より格別のご指導・ご助言を頂き、また本校教職員の多大なご努力のおかげによりまして、この事業が無事終了しましたことに、心から敬意と感謝の意を表します。

本校の教育活動が、この事業の経験を踏まえ、さらなる前進を続けられますよう心より願っております。

## 校長あいさつ

光 富 祥

入学者の3割前後が入学年度に中途退学をしていた平成15年度以前の学校の状況から、不登校や中途退学者をなんとか減らしたいと、生徒の実態調査を基にした「生徒ひとり一人が大切にされていると思える学校環境づくりと人間関係調整力の育成」に重点を置いた新たな学校づくりを平成16年度よりスタートさせました。

また、平成25年度よりは「学力保障グループ」と「社会性育成グループ」に教職員が分かれ、授業法の工夫や教材研究、行事等を活用しての社会性育成の研究にも取り組んできました。

これまでの取り組みの成果は、中途退学者減、生徒数増として表れてきてはいますが、今後ますます多様化する教育的支援に対応していくためには、今までの取り組みを整理してシステム化を図り、組織として協働できる環境を整える必要があると考え、本事業に挑戦することにしました。

文部科学省の事業に手を挙げることは、それなりの成果が求められ後回しにできないというプレッシャーもありますが、日々の教育活動を振り返る機会にもなり、自分たちの教育力向上と学校改善を積極的に進めるには良い刺激になると考えた次第です。

今後も教職員力を合わせて、受け入れた生徒ひとり一人に自立（自律）できる力をしっかり身に付けて送り出せる学校づくりを目指して取り組んでいきたいと思えます。

## 目次

◎ 本校の概要	3
<b>第1章 調査研究課題（研究主題）</b>	
第1節 調査研究課題（研究主題）と主題の意味	5
第2節 研究組織と研究計画（実績）	9
<b>第2章 研究の実際〔実態調査〕</b>	10
第1節 生徒への実態調査	11
第2節 職員への実態調査	14
第3節 生徒を取り巻く環境	16
<b>第3章 研究の実際〔自立支援プログラム〕</b>	18
第1節 基礎学力の育成（集団）～ 授業づくり	19
第2節 基礎学力の育成（個別）～ スタディルーム	25
第3節 社会性の育成（集団）～ ロングホームルーム（LHR）活動	30
第4節 社会性の育成（個別）～ コミュニケーション講座	40
太平洋キッチン	44
<b>第4章 研究の実際〔地域連携プログラム〕</b>	49
第1節 大学との連携 ～ 学習支援	50
ピア・サポート活動	55
第2節 地域との連携 ～ ボランティア活動（DAC）	60
第3節 支援機関との連携	66
<b>第5章 研究のまとめ（成果と課題）</b>	77
<b>資料（調査研究で使用了した調査用紙と結果）</b>	79

# 太平洋学園高等学校の概要

## 1. 学校の沿革

- 昭和21年(1946) 高知女子専門学園を開校  
昭和23年(1948) 高等学校に類する各種学校として認可  
昭和41年(1966) 高知女子高等学校(通信制)を開校  
昭和51年(1976) 高知女子専門学園を高知女子専門学校と改名  
高等専修課程と専門課程、一般課程を置く  
平成5年(1993) 太平洋学園高等学校・専門学校に校名変更  
商業科を新たに設置し男女共学とする  
平成13年(2001) 定時制高等学校設立 総合学科設置  
平成15年(2003) 専門学校専門課程及び高等課程を廃止  
新校舎落成  
平成16年(2004) 新たな学校づくり開始  
平成27年(2015) 文部科学省「多様な学習を支援する高等学校の推進事業」受託  
平成27年度～平成29年度〔3年間〕  
平成28年(2016) 文部科学省「キャリア教育・就労支援等の充実事業」受託〔1年間〕

## 2. 教育方針

### (1) 教育目標

いつでも、どこでもたくましく  
生きる力を身につけた人材の育成

### (2) 教育方針

個性の伸長 国際感覚の育成



## 3. 学校の特徴

### (1) 課程

昼間定時制課程 (I部、9:00～12:30、II部、10:50～14:55)  
通信制課程 (水曜スクーリング昼間コース・夜間コース、土曜スクーリングコース)  
※ 定通併修、通定併修が校内で可能  
※ 定時制課程から通信制課程へ、通信制課程から定時制課程への校内転籍が可能

### (2) 単位制

### (3) 総合学科

普通系列 (基礎コース、応用コース)  
教養系列 (情報コース、福祉コース、軽音コース、美容コース、被服コース)

### (4) 2学期制

前期 (4月～9月)、後期 (10月～3月)  
学期毎に単位認定 ※ 10月入学、9月卒業も可能

#### 4. 生徒数

表1 生徒数

平成29年4月 現在

定時制 生徒数	総合学科	年次	1年次			2年次			3・4年次以上			合 計		
		性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
		計	38	38	76	33	34	67	33	34	67	104	106	210
通信制 生徒数	総合学科	年次	1年次			2年次			3・4年次以上			合 計		
		性別	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
		計	17	13	30	21	20	41	41	49	90	79	82	161
定時制・通信制 合計			55	51	106	54	54	108	74	83	157	183	188	371

#### 5. 生徒の現状

##### (1) 生徒自身の抱える課題

表2は、平成29年度の入学生に対して、その入学の前後に中学校や教育センター、適応指導教室などの支援機関を訪問し生徒のようすを聞き取り調査した内容に基づいて作成したものである。

表2 平成29年度入学者の状況（定通106名）

小・中学校で不登校や別室登校の経験のある生徒	80名	75.4%
発達障害や知的障害、神経症等の診断、その疑いのある生徒	41名	38.6%

※ 入学時の中学校や教育センター等からの聞き取り調査に基づいて作成

※ 人数は重複あり

##### (2) 生徒の経済的な環境

表3は、平成27年度～平成29年度の生徒の就学支援金の受給状況を示したものである。本校では9割を超える生徒が就学支援金を受給している。また、授業料全額免除者の割合が平成29年度は58.0%に達し、生活保護世帯の割合も年々増加している。

表3 就学支援金の受給状況

年度	無受給	基本 4,812円	1.5倍 7,218円	2.0倍 9,624円	2.5倍 12,030円	計	保護世帯
27	3	80	54	96	106	339	30
	0.9%	23.6%	15.9%	28.3%	31.3%		8.8%
28	23	43	86	79	135	366	41
	6.3%	11.7%	15.9%	23.5%	36.9%		11.2%
29	28	41	87	56	159	371	49
	7.5%	11.1%	23.5%	15.1%	42.9%		13.2%

※1. 就学支援金は市町村民税の所得割で決まる。

※2. 就学支援金が1.5倍の世帯の生徒は半額、2.0倍以上の世帯の生徒は全額、科目登録料を免除している。

# 第1章 調査研究課題（研究主題）

## 第1節 調査研究課題（研究主題）と主題の意味

### 調査研究課題〔研究主題〕

定時制・通信制課程における生徒の自立を促す支援・相談体制の構築  
～「自立支援プログラム」「地域連携プログラム」の作成と実践を通して～

#### 1. 主題の意味

##### (1) 生徒の自立を促す教育相談体制の構築

「生徒の自立」のためには、生徒が将来にわたって生きていける学力やコミュニケーション力を有し、より充実した生活をしようとする意欲を持てることが大切なことであると考え。具体的には、次のようなことが考えられる。

- ①生活するための学力や仕事内容を理解する力、さらに学ぼうとする意欲がある。
- ②周囲の人と適切な距離感で、場や状況に応じたコミュニケーションをとることができる。
- ③就業し、それを継続しようとする意欲を持ち実行することができる。
- ④経済的に収支バランスのとれた生活を維持、継続できる。

また、何らかの特性を有する生徒の自立のためには、生徒自身の特性の自己理解や自己受容を促進し、福祉サービスの活用、さまざまな支援機関や団体との連携などを図りながら、その生徒なりの自立を支援していくことが大切だと考える。

将来にわたって、生徒が、その生徒なりに自立できるように、自立を促すような指導や支援に取り組むことを通して支援・相談体制を構築し充実させていく。

##### (2) 自立支援プログラム

「自立支援プログラム」とは、生徒自身の力で生活のための学力や社会性のスキルを直に獲得することを支援するものである。「自立支援プログラム」では、生徒自身が生きる力をより強いものとするよう、基礎学力の向上と社会性の育成に取り組む。基礎学力では全体として分かる・主体的な活動の授業づくりに取り組みながら、個別の支援としてスタディールーム（学習室）を開設する。社会性の育成では、全体としてLHRでの特設授業を実施すると共に、個別の支援としてコミュニケーション講座や太平洋キッチン（料理教室）の自主講座を開設する。

##### (3) 地域連携プログラム

「地域連携プログラム」とは、地域のさまざまな資源を活用し、生徒が他者や地域とかわるることによって、地域の支援機関との連携を図り、高校卒業後も見据えた自立への支援につなげていこうとするものである。「地域連携プログラム」では、生徒のボランティアサークル（Dynamic Activities Circle、以下DAC）による地域貢献活動、大学と連携した学生による生徒支援活動、学校に常駐するスクールソーシャルワーカー（以下、SSW）を軸に教育や医療、

福祉、NPOなどの関係機関との情報交換や支援会の開催などを通して生徒や保護者への支援活動を行う。さらに、就職支援コーディネーター（以下、就職支援C o）とも協働し職場体験学習や生徒の特性に応じた就労支援などを行うことにより、学校生活を継続するための支援だけでなく卒業後の自立につなげていく活動をめざしていく。

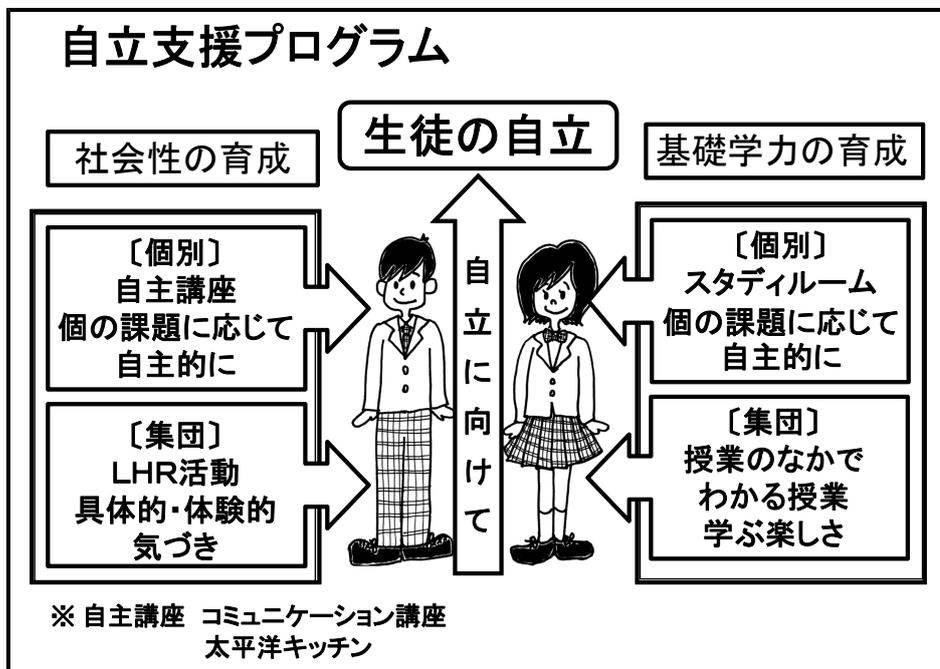


図 I - 1 自立支援プログラムの構想

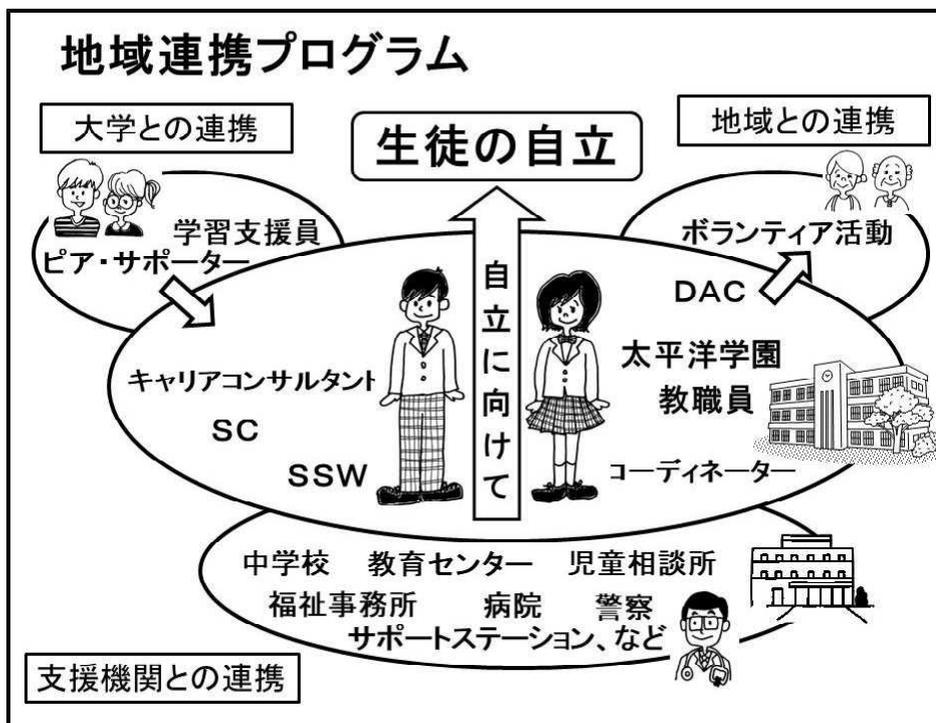


図 I - 2 地域連携プログラムの構想

## 2. 主題設定の理由

### (1) 社会的要請から

不登校生徒の数が減少する気配はなく、発達障害やその疑いを感じさせる生徒の数も学校現場にいと増えているのではないかと思われる。また、さまざまな統計では、虐待の件数や経済的困窮者の数も増加していることが指摘されている。虐待や貧困の長期化、またその世代間連鎖のなかで、さまざまな疾病に罹患したり、生徒の不登校とそれに伴う未学習や生活体験の著しい不足の課題が生じたりと多くの困難を複合的に背負ってしまっている生徒や保護者も多く見受けられる。このような生徒そしてその背後にいる保護者、環境としての家族への早急な支援が求められている。

そのため学校としても、生徒が社会の中で生きていくための学力や社会性を獲得できるよう適切な支援を行うと共に、地域の関係機関との連携や協働により生徒を取り巻く環境にも働きかけ調整していくような支援・教育相談のあり方が必要だと考える。

### (2) 教育施策から

中央教育審議会（初等中等教育分科会高等学校教育部会、平成26年6月）は「高校教育の質の確保・向上に向けて」のなかで、全ての生徒が共通に身につける資質・能力「コア」の育成を指摘している。また、多様な生徒や学習ニーズに対応するため定時制・通信制課程における学習支援や教育相談、進路指導等の充実、学外機関との連携促進とそのため職員の配置促進も指摘している。

また、教育相談等に関する調査研究協力者会議は、「児童生徒の教育相談の充実について～学校の教育力を高める組織的な教育相談体制づくり～」(平成29年1月)のなかで、学校内の生徒指導・教育相談担当職員・養護教諭・特別支援教育コーディネーター（以下、特別支援教育C o）、スクールカウンセラー（以下、S C）、S S W等の関係者がチームとして取り組み、事案によっては校外の関係機関と連携した活動ができるような教育相談の体制づくりの重要性を指摘している。

生徒が社会の中で生きていくために必要な「コア」となる学力やコミュニケーション力を育成し、事案によっては地域のさまざまな資源を有する関係機関と連携して活動するために校内の支援・教育相談体制を充実させていこうとする本研究のねらいは、中央教育審議会のまとめや教育相談等に関する調査研究協力者会議の報告の内容とも合致すると考える。

### (3) 本校の今日的な課題から

本校は平成5年度からさまざまな課題や特性を有する生徒を多く受け入れてきた。そして、それまでの学校の状況を踏まえて平成16年度からは、昼間定時制と通信制の2つの課程を持っていること、また単位制の総合学科という利点、さらに学校規模が大きくないこともあり、柔軟できめ細やかな指導や支援を行ってきた。その結果、ここ数年の生徒の中途退学者の割合は定時制・通信制課程を合わせて3%前後（平成25年度：本県の県立高校では定時制8.5%、通信制20.7%）で推移している。また、さまざまな課題や特性を有する生徒の受け皿・居場所として、本校は中学校や適応指導教室などからも信頼され高い評価を得るようになってきた。

しかし、居場所を得たことで自らの力で成長していく生徒がいる一方で、本校に入学し居場所を得たとしても、そのために長い時間がかかってしまい、それまでの未学習や生活のスキル

の未獲得、社会の中で生きていこうとする力の弱さなどの課題の解決が不十分なまま卒業に至ってしまう生徒も一部で見受けられる。

これらの生徒に、社会の中で生きていくなかでコアとなる学力や生活のスキル、コミュニケーション力などを高校生活の間に育成していくことの必要性を痛感するようになった。また、生徒の中には生活環境の厳しさや疾患、特性などから高校卒業後も何らかの支援が必要な者もいる。そのような生徒にも、地域のさまざまな支援機関や団体などと連携・協働してその生徒なりの自立につなげていく取り組みの必要性も強く感じている。

そこで本研究では、高校卒業後に生徒が社会の中で自立して生きていけるように、高校でどのような指導や支援・教育相談を行えばいいのか、その具体的な実践例のひとつを示したいと考えた。

### 3. 研究の目標（研究仮説）

「自立支援プログラム」と「地域連携プログラム」を作成し実践することを通して、定時制・通信制課程において生徒の自立を促すための支援や教育相談を行いながら、その体制を構築する。

## 第2節 研究組織と研究計画（実績）

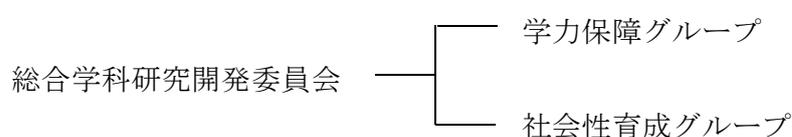
### 1. 研究組織

本研究に全職員で取り組むこととし、学力保障グループと社会性育成グループに振り分けた。

学力保障グループでは、分かる・主体的な活動の授業づくりやスタディールーム（学習室）の設置や運営、学習支援員（大学生）の活用などに取り組んだ。

社会性育成グループではLHRでの特設授業や学校行事での社会性の育成やソーシャルスキルの向上に取り組んだ。

さらに、校務分掌のボランティアや教育相談の係などが地域連携の活動やそのあり方についての調査研究を行った。



### 2. 研究計画（実績）

#### (1) 1年次

ア 理論研究

イ 実態調査

ウ 本校のこれまでの取り組みの検証と課題の確認、次年度の実践内容の検討

エ 調査研究報告会（実態調査の結果と次年度の取り組みについて）

#### (2) 2年次

ア 生徒の自立を支援する取り組みの実践 ⇒ 「自立支援プログラム」の作成

イ 「自立支援プログラム」に基づく個々の支援内容の評価と再検討

ウ 「地域連携プログラム」作成のための理論化と資料整理

エ 調査研究報告会（「自立支援プログラム」の内容と結果、次年度の取り組みについて）

#### (3) 3年次

ア 「自立支援プログラム」に基づいた支援の実施と改善

イ 入学前、在学中、卒業後を含めた生徒の自立のための「地域連携プログラム」の作成、その実践と評価

ウ 研究の成果と課題のまとめ

エ 調査研究報告会（3年間の成果と課題について）

## **第2章 実態調査**

### **第1節 生徒への調査**

### **第2節 教職員への調査**

### **第3節 生徒を取り巻く環境**

## 第1節 生徒への実態調査

### 1. 生徒への実態調査

生徒が学校を中心とした生活のなかで、どのように考え、どのように感じているのかを確認しようと、本校の定時制と通信制に在籍する全生徒を対象に平成27年度と平成28年度の2回アンケートを実施した。

平成27年度と平成28年度の調査結果に、全体として大きな変化は見られなかった。

また、定時制と通信制、年次毎の集計でも全体として顕著な有意差はなかったので、ここでは平成27年度の調査結果を基に報告する。

平成27年度は定時制生徒136名（男子71名、女子65名）、通信制生徒（男子59名、女子59名）の計254名から回答を得た。年次別では1年次77名（男子44名、女子33名）、2年次92名（男子52名、女子40名）、3年次73名（男子28名、女子45名）、4年次以上12名（男子6名、女子6名）であった。

#### (1) 生活習慣

「毎日の生活のなかで何をしている時が最も楽しいか」という自由記述の問いに対して、“ゲームをしているとき”や“寝るとき”と回答した生徒の数が多かった（全体の32.3%）。

また、“ない”とか“楽しいことはない”と回答した生徒もいた。

「楽しさ」を質問しているからそうなのかとも考えられるが、自分の将来の目標に向けての活動やスポーツなど、積極的で生産的な活動の記述が少ないように思われる。

表Ⅱ-1 生活習慣

毎日の生活のなかで何をしている時が最も楽しいですか。

定時制	通信制
ゲーム(30)	ゲーム(21)
寝るとき(17)	寝るとき(14)
音楽を聴く、音楽活動(15)	インターネット、動画、スマホ(11)
遊ぶ(13)	音楽を聴く、音楽活動(8)
アニメ、TV、DVD(11)	友だちとおしゃべり(8)
インターネット、動画、スマホ(11)	
なし、楽しくない(7)	なし、楽しくない(7)

( ) 内は人数、多いものから抜粋

#### (2) 自己意識

次に、生徒が自分自身をどのようにとらえているかについて質問した。その結果が表Ⅱ-2である。

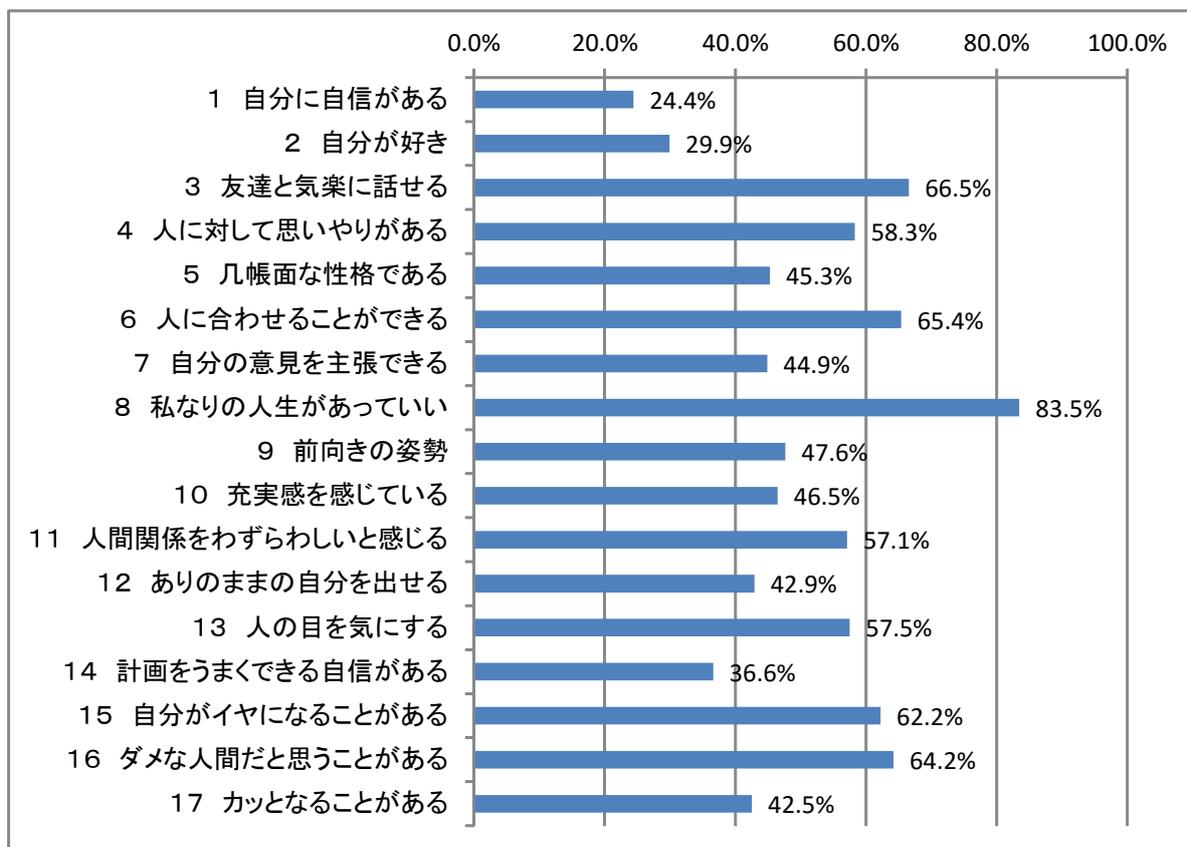
「自分に自信がある」に、全くそう思う・だいたいそう思うと回答した生徒は全体の24.4%にとどまり、あまり思わないは40.6%、全然思わないは33.5%であった。また、「自分が好き」に、全くそう思う・だいたいそう思うと回答した生徒は全体の29.9%であり、あまり思わないは36.6%、全然思わないは31.9%であった。自尊感情や自己肯定感をうまく持てていないと感じている生徒が7割を超えている。

「自分が立てた計画はうまくできる自信がある」に、全くそう思う・だいたいそう思うと回答した生徒は全体の36.7%であり、あまり思わないは40.9%、全然思わないは20.9%

%であった。自己効力感をうまく感じきれていない生徒が6割程度いる。

## 表Ⅱ－２ 自己意識

A：全くそう思う B：だいたいそう思う C：あまり思わない D：全然思わない  
 グラフは、“A：全くそう思う”と“B：だいたいそう思う”を合計した割合



「自分がイヤになることがある」に、全くそう思うと回答した生徒は29.9%、だいたいそう思うとした生徒は32.3%であり、自己嫌悪感を抱いている生徒は6割を超えている。「自分はダメな人間だと思うことがある」に、全くそう思うとした生徒は23.6%、だいたいそう思うとした生徒は40.6%であり、自己否定感を抱いている生徒も6割を超える。

自尊心や自己肯定感、自己効力感をうまく感じられなく、自己嫌悪感や自己否定感を抱いていると回答している生徒が6割～7割に達する。青年期の頃は、ものごとを過大にとらえたり否定的に受け取ってしまう傾向もあるので、その数字の生徒の現実が実際にそうだと一概にいえませんが、少なくともそれなりの“うまくいかなさ”や“どうしようもなさ”を抱えて過ごしている生徒が多くいることは確かなことではないかと考える。

一方で、「私には私なりの人生があっいい」に、全くそう思うとした生徒は44.9%、だいたいそう思うとした生徒は38.6%であり、自己を受容している生徒は8割を超えた。ただ、他の質問への回答と合わせて考えたとき、“私なりの人生”が、積極的で肯定的に生きていこうとする意欲を持ちながらの受容であればいいのだが、『どうせ私なんか』みたいな消極的であきらめ的な気持ちを抱きながらの受容の結果として回答した生徒がいなか課題が残る。

### (3) 学校生活

表Ⅱ－３は学校生活に対する質問の回答結果で、A：全くそう思う、B：だいたいそう思うと肯定的に回答した生徒の割合は、「学校が好き」で74.4%、「学校生活に満足して

表Ⅱ－３ 学校生活(1)

A：全くそう思う B：だいたいそう思う  
C：あまり思わない D：全然思わない  
(5, 6は、A：いる B：いない)

	A	B	C	D	無回答
1 学校が好き	26.4%	48.0%	14.6%	8.3%	2.8%
2 学校生活に満足	24.8%	42.9%	18.9%	11.4%	2.0%
3 居場所がある	21.3%	43.3%	22.0%	10.2%	3.1%
4 落ち着いている	31.5%	41.3%	15.0%	9.4%	2.8%
5 親しい仲間がいる	70.1%	23.6%			6.3%
6 信頼できる先生がいる	66.1%	24.8%			9.1%

いる」で67.7%、「学校に居場所がある」で64.6%、「学校にいるとき緊張しないで落ちついて過ごせる」で72.8%であった。逆に言えば、2割～3割の生徒が学校生活に不満や不安を感じていることになる。また、そのことは、学校のなかで気楽に話せる親しい仲間がいないと回答した生徒は23.6%であり、気楽に話せる信頼できる先生がいないと回答した生徒は24.8%であることからいえる。

次に、「学校のなかでもっとも楽しいときは何をしているときか」(表Ⅱ－４)と記述で求めた質問に対し、「友だちと話す」「授業」などの回答とともに、「スマホ

表Ⅱ－４ 学校生活(2)

あなたが、学校のなかで、もっとも楽しいときは何をしているときですか。

定時制	通信制
友だちと話す、遊ぶ(35)	友だちと話す、遊ぶ(19)
体育、スポーツ(20)	体育、スポーツ(19)
音楽(7)	授業(6)
授業(6)	スマホ、ゲーム、携帯(4)
スマホ、ゲーム、携帯(6)	パソコン室(3)
先生と話す(5)	音楽、美術(3)
休み時間(5)	休み時間(3)
なし(18)	なし(22)

・ゲーム・携帯」のように必ずしも学校という場の特質を踏まえたものでない回答もあった。加えて、「ない」とした回答も多くあった。

また、「学校生活を通して、できるようになりたいことは何か」(表Ⅱ－５)と記述で求めた質問の回答には

表Ⅱ－５ 学校生活(4)

あなたが、学校生活を通して、できるようになりたいことは何ですか。

定時制	通信制
勉強(17)	勉強(22)
英語(4)、資格(2)、情報(2)	数学(2)、パソコン(2)、資格、英語
コミュニケーション力(16)	コミュニケーション力(8)
早寝・早起き、欠席をしない、卒業したい、自立できるようになりたい、 汽車にひとりで乗る、内向きな性格の改善、など	
なし、わからない(39)	なし、わからない(32)

( )内は人数、多いものから抜粋

“勉強”“コミュニケーション力”などが多く挙げられた一方で、“ない”“わからない”とした回答も多かった。加えて、“早寝早起き”や“ひとりで汽車に乗る”

など生活のスキルが未だ身につけていないための課題と思われるものもあった。

これらのことから、学校生活に積極的になれない、目標を持ってないまま過ごしている生徒が2割～3割程度いることが推察される。

## 第2節 教職員への実態調査

教職員が生徒の実情をどのように受け止めているのか、平成27年度にアンケートを行った。

### 1. 卒業時の生徒に対するイメージ

表Ⅱ-6は、職員に「ここ数年の本校の卒業生を振り返ってみて回答してください。細かく思い出していただく必要はありません。だいたいのところイメージして回答してください」としてアンケートを行った結果である。「仕事に継続して就労し、社会のなかで生きていくための基礎学力が十分でないまま卒業したと思われる生徒」が10名を超えると回答した職員は

76.2%であった。同じように「コミュニケーション力が十分でないまま卒業」が76.2%、「社会的なスキルが十分でないまま卒業」が52.4%、「規範意識やマナーの獲得が十分でないまま卒業」が23.8%、

表Ⅱ-6 教職員の卒業生に対するイメージ 回答者数21名  
A：10人以上 B：5人～9人 C：0～4人

1. 仕事に継続して就労し、社会のなかで生きていくための基礎学力（読み・書き・計算・一般常識など）が十分でないまま卒業したのではないかとと思われる生徒の数。	A	76.2%
	B	19.0%
	C	0.0%
2. 社会のなかで円滑な人間関係を維持していくためのコミュニケーション能力が十分でないまま卒業したのではないかとと思われる生徒の数。	A	76.2%
	B	19.0%
	C	0.0%
3. 社会のなかで主体的に活動するための社会的なスキル（役所などの利用、交通機関の利用、カードや通販などの仕組みなど）の獲得が十分でないまま卒業したのではないかとと思われる生徒の数。	A	52.4%
	B	42.9%
	C	0.0%
4. 社会のなかで逸脱しないための規範意識やマナーの獲得が十分でないまま卒業したのではないかとと思われる生徒の数。	A	23.8%
	B	47.6%
	C	23.8%
5. 社会のなかで自立していこうとする積極性や勤労への意欲が十分に育っていないまま卒業したのではないかとと思われる生徒の数。	A	52.4%
	B	19.0%
	C	23.8%

「自立のための積極性や意欲が十分でないまま卒業」が52.4%であった。

これらのことから、基礎学力やコミュニケーション力が不十分なまま卒業してしまっている生徒が10名前後はいると多くの職員が考えている。

## 2. 生徒の自立を促す教育活動のための課題

表Ⅱ－7は「生徒が社会の中で自立していくために、本校在学中に獲得して欲しいこと」を職員に記述を求めた内容を整理したものである。

表Ⅱ－8は「生徒の自立を促す教育活動のための課題」について職員に記述を求めた内容を整理したものである。

これらの内容から、社会のなかで使う基礎学力、基本的なマナーを含めたコミュニケーション力、社会的スキル、社会とつながろうとする・前向きに生きていこうとする力などを生徒に獲得して欲しい、そのための教育活動が必要だと考えている職員が多いことがわかる。また、そのためには生徒との人間関係づくり、生徒が確認できる具体的な目標設定、具体的で生活に根ざした教材や資料・指導法の工夫、そして教職員の共通理解に基づいた連携など課題として挙げられている。

### 表Ⅱ－7 生徒に獲得して欲しいこと

卒業後、生徒が社会の中で自立していくために、本校在学中に獲得して欲しいこと。

- ・社会のなかで生きていくための基礎学力。
- ・あいさつや返事、お礼などが表情や所作を伴ってできる。
- ・コミュニケーション力。自分の気持ちを表現できる。相談したり援助を求めたりできる。
- ・社会的スキル（買い物、公共交通機関の利用、金銭感覚など）。
- ・ある程度、自己を開示し他者と結ぼうという意識。
- ・他者との違いを受け入れ共感する力（理解でなく）。他者が居るという自覚。協調性。
- ・マナー、ＴＰＯに応じたふるまい、規範意識。
- ・社会とつながろうとする力、社会の中で前向きに生きていこうとする力。
- ・学ぼうとする姿勢。失敗をおそれずチャレンジすること。
- ・イヤなことでも時にはガマン、協力して最後までやり遂げる気持ちと行動。

### 表Ⅱ－8 生徒の自立を促す教育活動のための課題

- ・1→2→3→4→目標。ステップアップでのスキルトレーニングの導入。
- ・人とかかわり、コミュニケーション、対話のしかた、など。
- ・最低限のルール、マナー教育。人の話を聴く。
- ・イヤなことでもとりあえずは取り組む。 ・簡単なことでも出来たらホメる。
- ・目標や目的を見つけられるきっかけづくり。
- ・基礎学力もそうだが、教材を身近なものを使う。
- ・学習活動を生徒の自立とかかわらせて考える。
- ・卒業後の生活を具体的に学ぶ、検討する機会を設ける。
- ・生徒との人間関係づくり ・支援の意識は強く、もしくは“一緒に”の意識を強める。
- ・授業の教材研究。授業や行事等の反省。・行事ごとの目的や目標を明確に設定して実施する。
- ・教員同士の共通理解、連携。 ・時間や心の余裕が必要。

## 第3節 生徒を取り巻く環境

### 1. 生徒自身の抱える課題

表Ⅱ－9は、平成29年度の入学生に対して、その入学の前後に中学校や教育センター、適応指導教室などの支援機関を訪問し生徒のようすを聞き取り調査した内容に基づいて作成したものである。もちろん、聞き取り調査の内容によるものなので、細かな欠席理由や診断名、障害名などの確認を調査書や診断書で確認したものではない。それでも、“小・中学校で不登校や別室登校の経験のある”と中学校や支援機関の担当者から告げられた生徒の割合は、平成29年度入学生の75.4%であった。また、中学校や支援機関の担当者から、“発達障害や知的障害、神経症などの診断が出ている、通院歴がある、通院中である”とか“診断は受けていないが、学校（支援機関）ではその疑いがあると考えていた”と告げられた生徒の割合は、平成29年度入学生の38.6%であった。

この事実から、障害による特性からの生きづらさや行き詰まり感、不登校や別室登校などに伴う未学習も含めた基礎学力の不足、人とかかわる力の弱さ、公共交通機関の利用や買い物などの生活のスキルの未習得などの課題を抱えた生徒が多数いると思われる。

表Ⅱ－9 平成29年度入学者の状況（定通106名）

小・中学校で不登校や別室登校の経験のある生徒	80名	75.4%
発達障害や知的障害、神経症等の診断、その疑いのある生徒	41名	38.6%

※ 入学時の中学校や教育センター等からの聞き取り調査に基づいて作成  
 ※ 人数は重複あり

### 2. 生徒の経済的な環境

表Ⅱ－10は、平成27年度～平成29年度の生徒の就学支援金の受給状況を示したものである。就学支援金の支給は市町村民税の所得割によって決定されるが、本校では9割を超える生徒が受給している。また、就学支援金が2.0倍、2.5倍の支給が決定すると授業料も全額免除となるが、その割合もほぼ6割に達している。また、生活保護世帯の割合も年々増加している。経済的に苦しい状況のなかで、子どもが障害を抱えていたり長期の不登校であったりすると、さらに苦しく余裕のない生活に追い込まれるし、そのことが新たな困難や障害を生んでいくこともあると推察される。

このような状況にある生徒が、さまざまな負の世代間の連鎖、環境の連鎖などに飲み込まれることなく、将来にわたって自立できるような力を獲得するための支援が求められていると考える。

表Ⅱ－10 就学支援金の受給状況

年度	無受給	基本 4,812円	1.5倍 7,218円	2.0倍 9,624円	2.5倍 12,030円	計	保護世帯
27	3	80	54	96	106	339	30
	0.9%	23.6%	15.9%	28.3%	31.3%		8.8%
28	23	43	86	79	135	366	41
	6.3%	11.7%	15.9%	23.5%	36.9%		11.2%
29	28	41	87	56	159	371	49
	7.5%	11.1%	23.5%	15.1%	42.9%		13.2%

※1. 就学支援金は市町村民税の所得割で決まる。

※2. 就学支援金が1.5倍の世帯の生徒は半額、2.0倍以上の世帯の生徒は全額、科目登録料を免除している。

## 2. 実態調査から研究主題へ

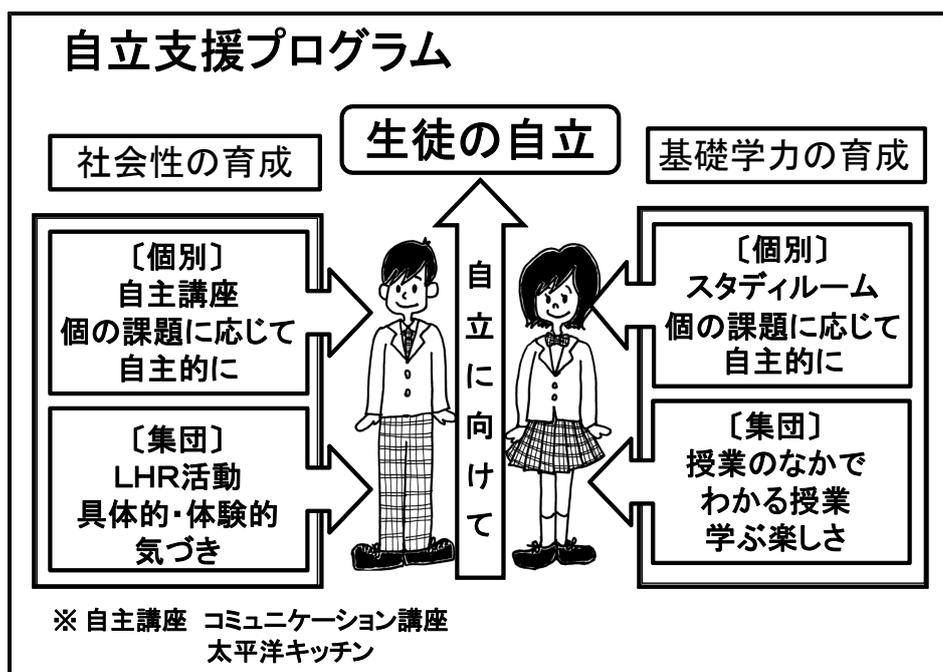
生徒への実態調査から、自尊感情や自己肯定感をうまく持てていない生徒が多いこと、自己嫌悪感や自己否定感を抱いていると思われる生徒が一定数いること、学校生活に積極的になれない、目標を持たないままに過ごしている生徒が2割～3割程度いることも推察された。

職員への実態調査からは、社会的なスキルや基礎学力の獲得が十分でないまま卒業している生徒がいること、基礎学力やコミュニケーション力をつけ社会のなかで前向きに生きていこうとする意欲を育てることの必要性が指摘された。

さらに、生徒を取り巻く環境の厳しさから、生徒が、それに押しつぶされることなく自立できるような力を獲得するための支援が求められている。

これらの実態調査の結果を踏まえると、「自立支援プログラム」で生徒の基礎学力やコミュニケーション力などを高め、「地域連携プログラム」で地域の関係機関と連携しながらそれぞれの生徒なりの自立を支援していくための教育相談体制づくりをしようとする本研究のねらいは意味あるものとする。

### 第3章 研究の実際〔自立支援プログラム〕



第1節 基礎学力の育成（集団）～ 授業づくり

第2節 基礎学力の育成（個別）～ スタディールーム

第3節 社会性の育成（集団）～ LHR活動

第4節 社会性の育成（個別）～ コミュニケーション講座  
太平洋キッチン

## 第1節 基礎学力の育成（集団）～ 授業づくり

### 1. 基礎学力の取り組みについて

平成16年度以降の本校における学校改革のなかで、特別支援教育に関する校内研修を数度にわたり実施し、外部の研修にも教員が積極的に参加していくなかで、授業改善の取り組みも進んできた。平成21年度より、高知大学教育学部と「学習支援に関する共同研究」（研究代表者・加藤誠之准教授）を開始し、現在に至っている。その特徴は、日常の授業に大学院生・大学生が学習支援員として生徒への学習支援を行うというものである。平成24年度より大学院生・大学生を「学習支援員」として採用し、継続的に日々の授業に支援に入るとともに、大学のゼミで定期的にケース検討会も行っており、支援を要する生徒への見取りを共有し、年度末には学習支援レポート集も発行している。平成28年度以降は、学習支援員対象の研修も実施している。

さて、学習支援員制度を導入することで、問われたのは私たち教員の授業方法である。これまで特別支援教育の視点で「授業の構造化」（ユニバーサルデザイン）などについて研修を重ねてきた。また、従来のような一斉授業中心の方法では、学習支援員がその役割を積極的に果たすことができない。そこで、近年全国的に広がっている参加型の学習（アクティブラーニング：AL等）の実践に学び、先進的事例の視察や校内研修などを重ねたうえで、平成26年度より「協同学習」をスタートすることにした。あわせて、平成26年度よりICTの積極的活用にも取り組んでおり、デジタル教科書やiPad、実物投影機等様々なデジタル機器を利用した授業実践に取り組みられるようになってきた。

さらに、本校では、長期の不登校による学習空白や発達障害等によって学習が困難な生徒に対して、様々な学習支援の工夫を行ってきた。また、高大接続改革において、高校における授業改革も重要な課題となっている。本校では生徒の「活用・表現力」の育成をめざし授業改革にも取り組んでいる。ここでは、この2つの視点からこの間の各教科における実践を紹介する。

### 2. 各教科の実践

#### (1) 授業における効果的な支援

##### ○ 地歴公民科

受講者には不登校経験者がとても多いこと、外国にゆかりのある生徒や学習障害のある生徒もいた。そこで、授業開始前にアンケートを実施し、授業やプリントで配慮してほしいことを書いてもらった。結果からは、漢字の読み書きに自信がない生徒が多数いることが分かった。このアンケート結果は毎週サポートに入っている学習支援員にも目を通してもらい、支援の参考にしてもらった。アンケートの結果をもとに、授業で使用するプリントや資料にはふりがなをふるようにするとともに、プリント1枚に対して解答欄は10個程度までとし、生徒がスモールステップで取り組みやすいものにするなどの工夫もした。また、プリントには、自由記述欄を設け、生徒にプリントで改善してほしい点や授業への要求などを書いてもらう欄を設けるようにした。その欄の中に、「授業で先生が話したことをメモしたいから、メモ欄を作ってほし

い」という声があったため、次回の授業からメモ欄を設けたり、プリントに自由に書き込みができるよう、空白の部分が多く作るように工夫した。その欄には、授業に対する意見や不満を書いてくる生徒もおり、そうした意見をもとに、進学を意識した発展的な内容のプリントも準備し、要望のある生徒には宿題として配布するようになった。

授業内容面では、日本国憲法の改正が話題になっていたこともあり、「日本国憲法」の単元は時間をとって丁寧に取り組んだ。「憲法」って何？というところから学習を進めるために、まずは「憲法」と聞いてイメージすることを箇条書きで書いてもらった。生徒が記入した中で一番多かった「法律」という語句を用いて、「憲法」は国家（権力者）が守るべきもの、「法律」は私たち国民が守るべきものということを学習した。2番目に回答が多かった語句は「大事」や「守るべきもの」であった。その後、日本国憲法が作成されるまでの経緯について学習した。この経緯については、イラストを用いたプリントを作成し使用した。このイラスト付きのプリントは「分かりやすかった」と生徒に好評だった。授業の中では、写真やグラフをスライドで拡大して使用することも多かった。例えば、「日本国憲法」の単元では、昭和天皇とマッカーサーの写真のスライドを見て気づいたことを挙げてもらった。前回の授業で「明治憲法」についてとりあげ、当時昭和天皇は国民に「現人神」と崇められていたという話をしてきたため、この写真が当時の日本国民にとってどれだけ衝撃的なものだったかを説明。その上で、この撮影後に行われた、昭和天皇とマッカーサー2人だけで行われた対談についてのエピソードを話し、その対談が、その後の憲法改正に大きな影響を与えたと言われていることを学習した。この授業後の授業感想が最もたくさん寄せられ、生徒たちも関心をもって取り組んでくれたことが窺えた。

## ○ 英語

授業は、原則として平均4～5人で机を向かい合わせて座る形で行った。授業の最初で、調べたい国のアンケートをとり、その結果を参考にグループを作り、模造紙にまとめて、その後教室に掲示をした。特に発表はしなかったが、各国のまとめについて眺めている様子があった。文法についてはパワーポイントを使って前で教員が説明をしたあと、重要動詞の確認をフラッシュカードのようにして確認。その後各自プリントを行った。各文法毎に最初の10分程度は文法、動詞の確認をしてからプリントを進めた。各グループには英語の基礎的な部分が定着していない生徒があり、プリントが進まず苦戦している生徒もいた。そのような時に、近くに座っている生徒が説明をして数人で問題に向かう場面が多々あった。生徒どうしで教えたり教えられたりしながら繰り返し文法を勉強することで、文法に慣れていった生徒もいた。短い英文や単語の発音の練習をする際は、授業をとっている生徒の中に発音のきれいな子がおり、その子が積極的に声を出してくれるため、それに良い影響を受け周りの生徒も発音をすることがあった。

## ○ 書道 I

本科目の選択者は、小・中学校時に不登校であったり、発達障害などによって学習が困難な者が多い。最初の授業の際に 机に硯、下敷きなどの配置を実際に現物を置いて説明するが、前期の最後まで右利きの生徒であるが硯を左側に置く者がいた。毎回準備段階でそれとなく横に立ち訂正をするようにした。



間違い（右利きの場合）  
写真Ⅲ－１ 用具の配置



正しい（右利きの場合）

次に、その日の課題の手本をプロジェクタを使用し説明予定であったが、間近で書いているのを見たいと言う希望があり、机の周りに生徒を集め一字一字書き方を確認させ手本を書くことにした。

生徒は、最初のうちは筆順にも気をつけて書いていくが、そのうちに自己流の筆順に戻ってしまっていた。添削時にも筆順を説明するのだが最終的にはまた自己流になっていくので、その後は、手本にも筆順を書いたものを渡すようにしたが、やはり自己流に戻ってしまう。気がついた時点で注意する必要がある。

最後に、ここで筆順について取り上げた理由だが、生徒が小・中学校と学習空白の時間が多かったためか、自分の氏名を書く際、筆順がまちがっている生徒が多いので、人前で書くなど、今後も日常的に使用する機会が多い氏名などは正しい筆順で書けるようになって欲しいという願いもあり、今後も続けて指導していきたい。

## (2) 授業における表現・活用力の育成

### ○ 理科

定時制3年次・生物基礎受講者を対象とした。卒業年次ということで、上級学校の試験や就職試験を受ける際、文字を書くこと、文章を書くことへの抵抗を少しでも減らしていきたいと考えた。また、たくさんの資料（文章）の中から、必要なことを抜き出す力、要点を抑える力を身につけることを目標とした。1時間1枚のプリントで、プリントの最後（裏）に、「〇〇について△△字以内でまとめよう。」といった、その時間の要約となるような課題を出した。添削形式で、試験前の授業でまとめて振り返りを行った。定期試験では、プラス点となるようにして出題した。進学、特に大学進学希望している生徒や、普段から学習意欲の高い生徒は、取りかかりもよく、よくまとめられていた。試験でも記述できていた。しかし、授業内で要約の課題を終えられる生徒が少なく、時間配分の工夫が必要と感じた。

### ○ 国語科

国語科においては、これまでも毎年何らかのかたちで作文教育に取り組んできた。そのなかでも、「国語総合」の教科書には「沖縄の手記から」（田宮虎彦）のような平和学習に適した教

材が収録されている。しかし、戦争と平和の問題をより身近なこととして考えてもらうために、これまでも地元高知の教材を活用した授業を行ってきた（たとえば、松吉千津子『ひと夏の少年兵－祖母のひとり語り－』平和資料館・草の家、平成21年7月発行、など）。2015年度からは、地元高知の青年が戦争体験者に聴き取りをしてまとめた『NO WAR IN OUR LIFE～戦争体験を永久に語り継ぐ～』（平成27年発行）に収録されている手記を読み、感想を作文にまとめる学習に取り組んできた。

学習の目的は、戦争体験者の手記を読み、地元高知における戦争の事実を知ること、そして平和の大切さを学ぶことである。事前に戦争体験の手記を出題することを予告し、おおまかな歴史的経過を説明した。そして、定期試験の問題に作文としての出題を含め（400字）、それを授業担当者がPC入力し、必要最小限の校正を行ったうえで、作品を文集としてまとめた。その後、授業で相互評価と自己評価を実施した。文集は手記の作成者を通して著者にお渡しした。生徒の作品を1つ紹介する。

私は、この戦争体験を読み、竹内さんの伝えたいことがすごく伝わってきました。

私たちは戦争を経験していないから、本当の怖さを知らないから、大臣も簡単にしか考えずに動こうとしています。きちんと考えなければならぬと思いました。今までならば、平和主義の憲法があったから、絶対戦争など起こらないと安心して考えていましたが、もしその憲法がなくなり戦争がはじまれば、兄や男友達や父やいとこなどが戦争に行き、私たちはずっと地下にかくれたりする生活などが始まると思うとゾッとします。

今まで原爆の日などに、ドームの前で誓ってきたことを裏切ることはしたくありません。大臣も自分が戦うわけじゃないから、あまりにも簡単にいうんだろうけど、もっと真剣に考えるべきだと思います。絶対に戦争のできる日本にしてはダメ。（2年女子）

本校では、定時制1年次において、毎年「戦争と平和を考える資料展」の見学学習を行ってきた（「産業社会と人間」）。そこでは、できるだけ実物（展示、現地の画像、証言、手記など）にふれることを重視してきた。戦争と平和を、抽象的な問題としてではなく、現実の社会とのつながりのなかで考えられるようにしたいと考えたからである。また、この実践を国語科として行ったのは、作文（書くこと）を単なるスキル練習の場とするのではなく、戦争体験という具体的なテーマを与えたうえで、書くことを通して、そのことについて自分自身がどうとらえ、そして考えたのかを表現させ、そして相互評価を通じて他者理解と自己理解を深めることを意図したからである。戦後70年を経た現在、戦争体験の継承は緊急の課題である。国語科における平和教育・学習の教材化に今後も積極的に取り組んでいきたい。

## ○ 数学科

数学Iの最初の単元「数と式」では、後の単元で必要になってくる数式の扱い（展開、因数分解など）を学習しているが、現実社会では自然・社会現象を数式で表現し、解釈することが重要になってくる。なお、授業ではどの演習もグループで行うか、個人で行うかは個々人に任せている。

また、試験においては意味や解釈を問う問題に加え、余計な情報の入った文章題から必要な情報だけを抜き出して答える問題も入れてみた。（今回は苦手な生徒を考慮し下線を入れた）本校の生徒で「数学＝計算」と思っている生徒は多数いると思われる。文章で答える問題を出すと「これ、数学と違うやん」などと戸惑われることがある。数式といえど言葉であるからどう解釈しどう伝えるかも重要だと考える。

数学で数式や概念の意味を説明したり、答えが1通りではないような問題に答えたりすることは「数学＝計算」と思っている生徒にとっては難しくもあり新鮮でもある。数学に苦手意識があり、これまでの数学経験が良くない生徒が多い本校では ①これまでとは違うやり方で教える ②内容を薄めずに必要なことを難しくともわかりやすく、という方針が大切だと思いきながらやってきた。文科省のいう「活用力」というものは「活用しながら理解を深める」という形でしか身につかないと考える。試行錯誤があり仲間と深め合い「活用力」の育まれる授業を追求していきたい。

② 2 乗して 2 になる数を 2 の平方根といいます。授業では面積が 2 になる正方形の 1 辺の長さとして 2 の平方根  $\sqrt{2}$  を定義しました。しかし、 $-\sqrt{2}$  も 2 の平方根になります。その理由を説明してください。(プリント 5)

③ 次の文章を読んで、後の問いに答えてください。(教科書 P.13 プリント 1)

A と B と C の 3 人は同じ高校に通う友達です。中間試験の数学の点数は A、B、C それぞれ、 $a$ 、 $b$ 、 $c$  でした。今日は中間試験の最終日。帰りに 3 人で最近でかた雑貨店に立ち寄りしました。A は  $x$  円のマグカップを 1 つ、B は 1 つ  $y$  円のキャンドルを 3 つ、C は 1 つ 300 円のハンカチを買いました。雑貨店を出て 3 人はそれぞれ帰途につきました。A は帰る前に毎日 2000 (m) のジョギングをしています。でも今日は疲れたので、いつもより短く 1 周  $a$  (m) の公園を 4 周走りました。

(1) A、B、C の 3 人の数学の試験の平均点はいくらかですか。

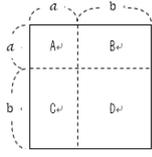
(2) 3 人が雑貨店で買った商品の値段の合計はいくらですか。

(3) この日、A がジョギングした距離はいつもよりどれだけ少ないですか。

④ 次のシチュエーションに対して、下の文字式は何を表していますか？(プリント 1)

右図のような縦横の長さの田んぼがあります。A、B、C、D は田んぼの所有者の名前です。

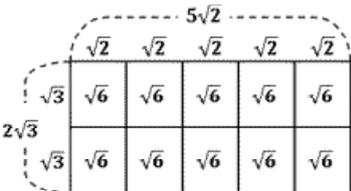
$(a+b)^2$  → 

$a^2 + b^2$  → 

⑤ 次の文字式に相応しいシチュエーションはなんですか。答えてください。文章でも絵を入れても構いません。(プリント 1)

$100 + 3a$

⑤  $2\sqrt{3} \times 5\sqrt{2} = (2 \times 5)\sqrt{3 \times 2}$  と  $a\sqrt{b}$  の形の数どうしの掛け算はルートの前の数字とルートの中の数字は別々に計算できます。その理由を下の図を参考して説明してください。(プリント 6)



⑥ 分母の有理化とはどうすることですか。説明してください。また、分母を有理化することによりどのような利点がありますか。(教科書 P.36 プリント 7)

分母の有理化 利点

図 III - 1 数学：演習問題の例

### ○ 体育科

本年度、定時制 1 年次の体育において重点的に取り組んだことは、1 つは授業ルールの共通理解である。体育授業は実技であるため、他の一般教科以上にケガ等の危険性が高い。そのため「自分と周りの皆の安全を守るため」のルールの理解が重要となることを逐一伝えることを意識した。具体例としては、授業に参加するための服装や準備物、荷物の置き場所、運動前の準備運動の必要性、運動中の身体の変化など。集団での実技授業ではルールを理解し互いに気

をつけることにより自分や周りの安全を守ること、参加する皆が精神的にも安心して落ち着いて授業に臨めることに繋がることを伝えた。これについては、定時制1年次については概ね共通理解として持てた。今後も生徒の安全と参加しやすい授業になるよう検討して実践していきたい。

2つ目としては、授業内容・具体的な支援についてである。主な授業内容としては、自分のできる範囲での参加であるため、必ず集団での活動とは限らないこととした。ただ、生徒からの要望の中には他者との関わり合いを希望するものも多いため、皆で活動の時間と個々に自由に活動できる時間それぞれを持ちながら行うことにしている。どちらの時間も参加するか否かの選択も生徒自身に託している。

それぞれの時間での成果と改善点を次に挙げる。

#### <全体での活動>

##### 成果

- ・授業内で生徒同士の関わりが増えたことにより、普段関わらないクラスメイトとも関わり合うことができた。クラスの中で仲の良い人（グループ）に限らず、どんな人が同じクラスに居るか意識できるようになった。
- ・自分ができること、自分はできないけれど〇〇さんはできる等の自分と他者の違いを見ることができた。オリジナルのスポーツテスト等では体力や技術の差等を他者と比べることができた。その違いをマイナスに捉えるばかりではなく、自分と他者の違いを認められるようなきっかけになるよう声かけ等をした。互いに声を掛け合い励まし合う姿や、達成感を得られることに繋がった場面が見られた。
- ・集団（他者）で活動するうえで、ルールや時間等守らなければ円滑に行うことができないような意識を持つことができるようになった。するべき事や時間を守らないと、自分も運動することができないという意識が少しずつ持てるようになった。

##### 改善点

- ・集団への抵抗感が強い生徒へ選択できる（参加するしない）以外の支援が不足していた。
- ・運動が苦手である生徒に強く意識が向いてしまい、得意な生徒への「プラスの課題」を見つけることが不足していた。
- ・自分自身で評価し、その後に繋げられるような成長が実感できる活動を入れることができなかった。

#### <個人での自由な活動>

##### 成果

- ・集団へ強い抵抗感のある生徒にとって参加しやすい授業形態になり、今まで体を動かすことを躊躇っていた生徒も運動をすることができた。
- ・同年代と関わりにくい生徒は教員と行えるなど、選択肢が多く持てる時間であった。

##### 課題

- ・自由度が高すぎてしまい、自由という概念を履き違えてしまう生徒も多い。（スマホ・ゲーム等）
- ・生徒数が増え、小グループ等で運動できるスペースや道具の確保が難しくなってきた。
- ・準備運動等の不足でケガの危険性が高い。

## 第2節 基礎学力の育成〔個別〕～スタディルーム

### 1. 進学補習

本校では、年間（前期・後期）の毎週金曜日放課後と、長期休業中（夏期・冬期）に進学補習を実施している。補習は上級学校進学希望者を対象として入試対策を行う「進学補習」と、授業の復習や小中学校の学習内容の復習を中心に行う「基礎学力補習」の2教室に分かれて実施している。どちらも希望者による自主参加としている。なお、補習は本校進路部が企画し、実際の学習支援は進路担当教員とともに大学院生・大学生による学習支援員とが担当している。まず最初に、平成27年度の実施状況について概観しておく。

平成27年度の実施状況は以下の通りである。

前期	進学・基礎	全12日（1日2時間）	参加者平均12名
夏季	進学・基礎	全10日（1日4時間）	参加者平均17名
後期	進学・基礎	全12日（1日2時間）	参加者平均12名
冬季	進学・基礎	全4日（1日4時間）	参加者平均14名

#### (1) 平成28年度前期進学補習の取り組み

平成28年度は、前期に計10日間実施した。参加者は、定時制課程平均11名、通信制課程平均4名であった。学習内容は、生徒の進路希望に応じて個別に準備した。進学補習では、センター試験や大学・短大・専門学校の推薦・一般入試対策、各種検定対策などを中心に行った。参加者は、具体的な進路希望を持ち、受験に必要な教科を重点的に学ぶ者が多く、1年次あるいは2年次から継続的に参加している者も多い。上級学校の受験を数年前に経験した学習支援員から聞く大学や受験の話は、教職員が話すそれと比べてリアリティがあり、どの生徒も学習支援員の話に真剣に耳を傾けている。実際に、検定対策では、これまで合格が困難だった英検準2級や漢検2級の合格者も出すことができた。

基礎学力補習では、授業のプリント等の復習を中心に、必要な生徒に対しては、小中学校レベルの基礎的な漢字の読みや計算問題などの学習も加え、さらに、通信制課程のレポートの支援も必要に応じて行った。こちらは、とくに1・2年次生の参加が多く、学習の合間に参加者どうしで雑談をしたり、学習支援員との会話を楽しんだりしていた。

こうした補習は、原則として希望者による自由参加であるが、普段の授業において学習に困難を持っている生徒に対して、担任や授業担当者が補習への参加を強くすすめた結果、参加した生徒もいる。また、本校の卒業生で、現在上級学校に在籍しているが、そこでの学習に困難を感じ、基礎的な事項を復習したいということで参加した者も数名いた。このように、進学補習、基礎学力補習における生徒に学びのニーズは極めて多様である。

進学補習には授業と同様、大学院生・大学生による学習支援員も学習支援に参加している。生徒によっては、1対1による個別指導でなければ学習に継続的に取り組むのが難しい者もいる。また、学習支援員とのかかわりを楽しみに補習に参加する生徒も少なくない。

なお、学習支援員は、補習の終了後に「学習支援記録」を作成し、生徒の学習状況を学習支援員や補習担当教員で共有するようにしている。

## (2) 平成28年度夏季進学補習の取り組み

平成28年度は、夏季補習を8月に10日間実施した。取り組みの状況は(1)と同様であるが、ここでは、具体的に生徒の様子を紹介する。

ある生徒は、英語を専門とする学習支援員の支援のもと、補習期間の10日間ほぼ英検対策に集中して学習に取り組んだ。また別の生徒は、大学受験に必要な理系科目対策に集中して学習に取り組んだ。このように、長期休業中の補習では、生徒のニーズに応じて集中的な学習に取り組むことができることが利点である。さらに、学習支援員が準備した数学のパズル教材に積極的に取り組んだ生徒や、漢字の「読み」を題材にホワイトボードを活用して具体的な場面を想定した問いをもとに学習に取り組んだ生徒もいた(写真Ⅲ-2)。学習支援員の専門性を活かしたかわりができることも補習の利点である。学習の合間には、生徒は学習支援員との会話を楽しむ場面も見られた。

## 2. スタディルーム

前述のように、原則として週1回の補習と長期休業中の補習を実施してきたが、そうした自主的な学習の機会をもっと増やしてほしいという意見は以前からあった。また、これまでも実際に、個別指導を希望する生徒に対して、進路担当教員や教科担当教員が空き時間に個別学習を行ったりしてきた。そうしたなかで、平成28年度より補習日である金曜日に加えて、火曜日と木曜日の午後に「スタディルーム」という名称で、自主参加の学習の場を開設することとした。当初は、生徒が気軽に学習に参加しやすいだろうという判断で、本校の「フリールーム」(生徒が自由に過ごせる居場所、飲食等も自由)を会場としたが、「うるさくて学習しにくい」といった参加者の意見や、一方で「フリールームで勉強っておかしくない?」という意見もあり、平成28年度第1回三者協議会(平成28年5月26日開催、生徒・保護者・教職員が学校づくりについてともに話し合う場)でも、生徒委員からそうした両論の意見が出され検討した結果、会場を2階のパソコン室に変更した。

スタディルームの運営は、学習支援員の経験を長く持つ本校教員と進路担当教員、そして非常勤職員として雇用している学習支援員とが協力して行っている。年度当初には、基礎学力定着のための教材を長年にわたり作成してきた方を講師に招き、教材作成のためのエクセル操作法の校内研修を実施し、そこで提供していただいた教材も活用している。国語の漢字や数学の計算などの基礎的なドリルを準備し、生徒が自由にプリントを選んでテイクアウトできるように、レターケースも設置した。また進学補習と同様、具体的な進路希望のニーズに応じた課題を個別に準備し、個別支援も随時行った。さらに、参加生徒ごとにカルテを作成し、日々の学習内容と取り組み状況について担当教員が毎回記入し、担当教員間で共有するようにしている。また、通常の学習以外にも、家庭科教員による実物教材を用いた消費者教育に関する学習なども随時行った。

ここでは、平成28年度前期の生徒の様子を紹介する。

写真Ⅲ-3は、フリールームで実施したスタディルームでの学習支援員と共に学習している生徒のようすである。参加生徒どうしで問題を解き合う協同的な学習の場面もよく見られた。

その後会場をパソコン室に変更し、参加生徒がそれぞれ自分に合った課題に取り組んでいる。パソコン室で実施することで、不明な点をインターネットで検索できるという利点がある。



写真Ⅲ－２ 学習のようす(1)



写真Ⅲ－３ 学習のようす(2)

### 3. その他の取り組み

平成27年度よりベネッセの「基礎力診断テスト」を定時制課程において年間2回実施している。このテストは義務教育段階の学力到達状況を正確に把握できることが特徴である。また、平成28年度よりリクルートの「スタディサプリ」を導入している。こちらは希望者のみであるが、現在9名の生徒が学習に取り組んでいる。

### 4. 成果と課題

#### (1) 成果

進学補習やスタディルームの取り組みの成果としては、以下の5点が考えられる。

まず第1に、ほぼ毎回のように参加する生徒がいることである。そしてその生徒は「〇〇先生おる？」というように、自分を担当してくれる教員を決めて参加している。担当教員も、その生徒の学習状況に応じた課題を選び、時には少し難度の高い課題を提示して学習意欲を高めようとしている。進学補習やスタディルームにおける生徒と教員の関係は、そうした信頼に基づいている。

第2に、上級学校入試対策として受験に必要な教科学習のペースメーカーとしてスタディルームを位置づけている生徒がいることである。スタディルームは、生徒と教員がほぼ1対1の個別支援体制なので、志望校や生徒の学力レベルに応じて、課題を個別に準備し、スモールステップで学習を積み上げていくことが可能である。

第3に、進学補習やスタディルームが学びなおしの機会となっていることである。中学校時代に不登校で英語が実質的に学習空白となっていることに不安を感じた生徒が、進学補習とともにスタディルームにも参加しはじめ、基礎的な英語の学習を続けた結果、英検4級レベルの問題の正答率が上がり始め、学習への自信を取り戻した例も見られた。

第4に、進学補習やスタディルームを、同じ生徒どうしのコミュニケーションを求めて参加する生徒がいることである。生徒どうしはもちろん、教員との会話も困難だった生徒が、教員との共通の話題による会話ができるようになったことだけに満足せず、学校内で「友達をつくりたい」ということで毎週の進学補習とともにスタディルームに参加するようになり、今では時には自然に会話を楽しむまでになっている例もある。そして、学びの場面における協同性も以前より見られるようになってきた。

第5に、進学補習には、大学院生・大学生を中心とした学習支援員が参加しており、そうした学習支援員とのかかわりを求めて参加する生徒も少なくない。学習支援員の多くは、午前中の通常授業にも学習支援に参加しているので、授業での様子をもとに学習支援の工夫を行うことが可能である。また、学習支援員と生徒との間に見られる関係性は、いわば「ナナメの関係」である。そうした関係性だからこそ、生徒は自分の思っていることを自由に言えるとともに、学習支援員という大人である他者が介在することで、第4の点と関わるが、生徒どうしの関係性をより促進させることも可能なのだと考えられる。

## (2) 課題

課題としては、第1に、こうした学習支援を必要としている学習に困難が見られる生徒の参加が、まだ一部にとどまっていることである。ホーム担任や進路担当教員も、そうした生徒に対して積極的に参加を呼びかけてはいるが、今後も地道な声かけが必要である。

第2に、スタディールームにおける学習支援は始まったばかりであり、参加する生徒の学習ニーズに応えられるような学習課題の開発、さらには具体的な学習支援の場におけるICTの積極的活用なども課題となるであろう。

第3に、進学補習やスタディールームに参加している生徒の学びへの参加の状況を、本校教職員がより共有することの必要性である。そのことが、教職員の子ども（生徒）理解の深化にもつながるであろう。

第4に、基礎力診断テストなどの結果を生徒の学力回復・向上に生かしていくことである。

そのためには、進学補習やスタディールームを今後より積極的に活用していくことが必要であろう。

## スタディールーム2017

本校では、生徒の皆さんの学習をサポートする場として、「スタディールーム」を開設しています。授業の復習、基礎学力の定着、進学・就職に向けての対策、通信制レポート対策など、皆さんのニーズに応じて活用してください。

**◆毎週 火曜日・木曜日**  
**5・6限 (13:15~14:55)**

学校行事日・長期休暇中等は除きます

**◆会場 206教室**

申し込みは不要です 当日教室にお越しください

**★金曜日は進学補習にぜひどうぞ!**

13:15~14:55 202教室 (自習)  
15:05~16:45 202教室 (補習)




図Ⅲ-2 開講案内のポスター

個人カード No.2			
名前	性別	学年	ホーム
学習内容			
1月2日 担当	出来た内容、出来なかった内容、難問など具体的に One-week トライル 13 数学 R8~9 $y=ax+b$ の関係。 2つの増加がわかれている時の増加量の関係。説明した。 One-week トライル 01 数学 R16 てお!!	使った教材	進研ゼミ
1月7日 担当	出来た内容、出来なかった内容、難問など具体的に 多角形の面積 → 整数の形がC7124にだけ説明する自信が スラスラ解けた。 平仮名 → 漢字の意味の書き分けの理解が解いた。0.5x50 の書き分けの意味の理解が解いた。0.5x50の書き分けの意味の理解が解いた。 2つの増加がわかれている時の増加量の関係。説明した。 One-week トライル 01 数学 R16 てお!!	使った教材	進研ゼミ
1月2日 担当	出来た内容、出来なかった内容、難問など具体的に 図形問題の興味深さ 丸い球の面積の問題に興味をもちました。 回転した時にできる立体の体積。	使った教材	進研ゼミ
1月7日 担当	出来た内容、出来なかった内容、難問など具体的に 前々から、おもしろいやり方は無い、いやいやの必要性、重要性と自分 で気付かないと存心で前向きには取り組まない。図形問題(多角形) の書き分けの意味の理解が解いた。0.5x50の書き分けの意味の理解が解いた。 2つの増加がわかれている時の増加量の関係。説明した。 One-week トライル 01 数学 R16 てお!!	使った教材	進研ゼミ 作成問題

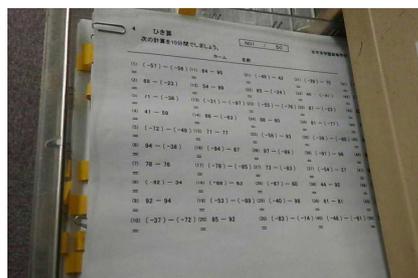
図Ⅲ-3 個人カード

表Ⅲ－１ スタディールームに準備している教材

授業復習プリント
英語、数学etc.
基礎学力関連
数学(四則計算、割合、比、文字式 etc.)
国語(漢字の読み書き、慣用句、四字熟語、ことわざ etc.)
その他(脳トレ、家庭科 etc.)
資格対策プリント
日本語検定、ニュース検体、英検 etc.
入試対策プリント
進学希望校に応じて過去問 etc.



写真Ⅲ－４ 教材の入ったレターケース



写真Ⅲ－５ レターケースの中の教材

表Ⅲ－２ スタディールームを利用している生徒へのアンケート

1. スタディールームを利用しての満足度は 

平均点	94.1
-----	------

 (100点法) n = 11

2. スタディールームを利用する頻度はどのくらいか。

ほぼ毎回	6人	週1回程度	1人	たまに	4人
------	----	-------	----	-----	----

3. スタディールームを利用する主な目的や理由は何か。

授業の予習・復習	1人	基礎の力をつける	3人	入試や資格試験の学習	6人
日常生活で役立つことを学ぶ	1人	その他	3人		

4. スタディールームの雰囲気はどうか。

とても良い	7人	まあまあ	4人	あまり	0人	全く良くない	0人
-------	----	------	----	-----	----	--------	----

5. スタディールームで主にどんなことを学習しているか。

授業の復習	0人	スタディールームに準備してあるプリント	5人
入試や資格試験のための課題	5人	その他	1人

6. スタディールームでの学習は集中できるか。

とてもできる	6人	まあまあ	4人	あまり	0人	全くできない	1人
--------	----	------	----	-----	----	--------	----

7. スタディールームでの学習は役立っていると思うか。

とても思う	9人	まあまあ	1人	あまり	0人	全く思わない	1人
-------	----	------	----	-----	----	--------	----

8. スタディールームでの先生の対応はどうか。

とても良い	9人	まあまあ	2人	どちらとも	0人	全く良くない	0人
-------	----	------	----	-------	----	--------	----

9. スタディールームでの先生の対応はどうか。

授業の復習プリント	4人	基礎(漢字の読み書きや計算)のプリント	5人
日常生活で役立つことがらのプリント	1人	入試や資格試験のためのプリント	6人

10. 記述内容から

・わからない所がわかるようになる。	・基礎が身につけてきているかも知れない。			
・集中して勉強できる。	・わかりやすく教えてくれる。	・自分のペースで勉強できる。		
・いろんな先生が手伝ってくれる。	・一人ひとりに合った接し方をしてくれる。			
・テストや資格取得に役立つ。	・みんなまじめ。	・自由な雰囲気がいい。		
・入試に向けての人と基礎を身につけたい人とを別にして欲しい。	・うるさい。			
・楽しい。	・やさしい。	・おちつく。	・おもしろい。	・ひまつぶし。

## 第3節 社会性（集団）～ LHR活動

### 1. 社会性育成の取り組みについて

本校の教育活動において、最大の課題は生徒が本校卒業後に社会のなかで自立し、その生徒なりの自己実現をめざして生きていけるような学力と社会性を生徒が獲得できるようにすることである。ソーシャルスキルトレーニング（SST）や構成的グループエンカウンター（SGE）、プロジェクトアドベンチャー（PA）など、さまざまな心理教育について教員がそれぞれに研鑽を積み、また学校でもたびたび教員研修を持ち学んできた。

しかしながら、本校には、不登校や別室登校の期間が長かったため学習が十分でない生徒、軽度の知的障害が疑われる生徒、学習意欲の乏しい生徒など学力に課題を有する生徒がいるかたわら、他者とのかかわりがうまくとれないでトラブルを抱えたり立ちすくんだりしている生徒もいる。このようにさまざまな課題や特性を抱える生徒達と同じクラスにいる状況で、仲間づくりやコミュニケーションスキル、ライフスキルなどの心理教育をすることの必要性は痛感しながらも、LHRの活動として一斉授業の形で実施できるだろうかとの不安や、生徒がさらに混乱するのではないだろうかとの危惧もあった。また、仲間づくりやスキルトレーニングなどをLHRで実施するとすれば、具体的にはどのようなテーマであれば、どのような進め方をすれば生徒は活動のねらいを理解しLHRの活動として受け入れてくれるのか迷う毎日であった。

今回、この調査研究事業を受けるにあたり、“ともかくやってみよう！”と、仲間づくりやスキルトレーニングなど生徒の社会性を育てるための活動を定時制課程のLHRで前期と後期にそれぞれ原則として2回ずつ取り組むことにした。前述のような状況のため、事前に年間計画を立て実施することが困難で、その都度、試行錯誤の実践となった。

また、学園祭やホームデー、体験発表会などの学校行事を円滑に実施し成功させるだけでなく、そのプロセスにも留意しLHRで学んださまざまなスキルの実践や確認の場でもあると位置づけLHR活動で実施したテーマと学校行事とを関連させるようにした。

表Ⅲ－3-1は平成28年度に実施した社会性育成のためのLHR活動のテーマであり、表Ⅲ－3-2は平成29年度の前期に実施したLHR活動のテーマである。表の“満足度”は、それぞれの活動に対する生徒の満足度を示している。

表Ⅲ－3-1 平成28年度 社会性育成のためのLHR活動

	1年次	満足度	2年次	満足度	3年次	満足度
前期	仲間づくり（調理）	71				
	いいところ探し	51	自己PR素材集め	63	自己PR素材集め	57
後期			ホームデー準備	67	面接対策	54
	上手な頼み方・断り方	64	上手な頼み方・断り方	74	上手な頼み方・断り方	37
	学園祭に向けて	61	学園祭に向けて	66	学園祭に向けて	51
学 園 祭						

表Ⅲ－3-2 平成29年度 社会性育成のためのLHR活動〔前期〕

	1年次	満足度	2年次	満足度	3年次	満足度
前期	仲間づくり（PA）	72				
	わたしの気持ち	61	考え・気持ち・行動の整理	60		
	みんなを知ろう	71	自己PR素材集め	53	ホームデー準備	78

## 2. LHR活動の実際（平成28年度、前期）

### (1) 1年次

「仲間づくり（調理）」は入学式の翌日に実施した。教員も生徒の班に入るが指示はほとんどしないで、生徒主導で自然とコミュニケーションが生まれるのを待った。最初は生徒にも緊張がみられたが徐々になごんできて互いに話し合いながら活動する姿が見られた。ただ、活動に入れない生徒も数人いた。生徒にとっては負荷が少し大きかったかもしれない。活動の最初にウォーミングアップとして簡単なゲームでも取り入れたら、もっとスムーズに進んだのではないかと考える。（表Ⅲ-4）

「いいとこさがし」では、生徒の不登校や人間関係のうまくいかなさなどの経験、また思春期の傾向でもあるだろうが、自己を肯定的にとらえることに困難を感じる生徒が多かった。

また、個人でワークシートに記入する時間が長く、仲間と交流する時間が少なかったことも生徒の活動の満足度が低かったことにつながったのではないかと考える。（表Ⅲ-5）

表Ⅲ-4-1 1年次「仲間づくり（調理）」

活動内容	①好きな調理を各自で選ばせて班を作る。 ②たこ焼き、焼きそば、フルーツポンチを班に分かれて協力し、クラス全員分を作る。 ③仕上がったら、シェアして食べる。 ※ 教員は指示をほとんどせず、生徒間でコミュニケーションをとりながら作業を進める。
生徒の様子	（初対面に近い状況）初めは会話が少なかったが、時間とともになごんできて、作業効率も上がり協力して作ることができた。
教員の評価	人数が多すぎて、教室に入りづらい生徒もいたが、廊下側から中を確認し、どのような生徒や仲間がいるのかが見ることができたのではないかと感じた。目的があり、協力して、何かを作って、分け合うことにより、人間関係の構築のよいきっかけとなったのではないかと感じた。



写真Ⅲ-12 生徒の様子

表Ⅲ-4-2 生徒の感想

始める前は不安だったが、活動している内に楽しくなった。話したことのない人とも話せたり協力もできた。活動する前はみんなあまり話さなかったけど、少しずつ会話が増えて、今回の活動は友達をつくるいいきっかけになったと思います。自分と同じ考え方や似た人を見つけることができた。	活動への満足度 71点/100 積極的に参加できた。 76% 活動を楽しめた。 93% 学校に慣れるのに役立った。 96% 皆と協力できた。 78%
---	--

表Ⅲ-5-1 1年次②2016 「いいとこさがし」

活動内容	自分、家族、友人のいいところを改めて見つめなおし、書き出すことにより、人間関係づくりに役立てるきっかけをつくる。
生徒の様子	特に自分自身のいいところを見つけられない生徒がかなり多く見られた。
教員の評価	自尊感情が低い生徒が多いことを再確認できた。伝え合うことの難しさを実感したように思う。

表Ⅲ-5-2 生徒の感想

・ 友達のいいところたくさん見つけられてよかった。 ・ 身近なひとのいいところを探すのは楽しかった。 ・ もうたくさん。 ・ 役立つとは思わない。	活動への満足度 51点/100 積極的に参加できた。 67% 活動を楽しめた。 66% 学校に慣れるのに役立った。 70% 皆と協力できた。 50%
--	--

## (2) 2年次

「自己PR素材集め」では、趣味や得意なこと、部活動、学校生活で楽しかったこと、将来やってみみたいことなどをワークシート（図Ⅲ-4）を使って自分のことを再確認していった。また、それをもとにグループで話し合った。これまで“うまくいかなさ”や“生きづらさ”を抱えてきて自分を肯定的にとらえること、肯定的に表現することに抵抗を感じる生徒もいる。だからこそ、生徒の自己肯定感を高めるためにも、このような活動のねらいは大切だと考える。自分の良さを自分で見つける・気づく活動だけでなく、仲間から自分の良さを伝えてもらう・仲間同士で語り合うような活動も考えていく必要がある。（表Ⅲ-6）

本校では、各期に一回、年次別に校外活動（ホームデー）を行っている。「ホームデー準備」では、その事前学習として訪問先の施設や設備についてグループで調べ、その内容をまとめ発表する活動を行った。生徒にとってはホームデーは楽しい行事のひとつであり、この「ホームデー準備」の活動は自由度の大きい活動であったため、仲間との交流もあり生徒の笑顔が多くみられた。（表Ⅲ-7）

表Ⅲ-6-1 2年次①2016 「自己PR素材集め」

活動内容	様々な自分に関する項目のある用紙に記入し、それをもとにグループごとに話し合う。
生徒の様子	自己PRをするのが苦手な生徒も多い中、紙に書くことでグループ内のみんなに自己PRすることができたと思う。
教員の評価	自分について考え、それを書き出すということを今まであまりしていなかったので、生徒も予想以上に熱心に取り組んでいたように思う。

表Ⅲ-6-2 生徒の感想

<ul style="list-style-type: none"> <li>・将来について悩んだ時は思い出そうと思った。</li> <li>・職業の幅が広がった</li> <li>・自分のことを知れるきっかけになった。</li> <li>・矛盾したことを書くのはつらい。</li> <li>・人の意見が聞けた。</li> </ul>	活動への満足度 63点/100 積極的に参加できた。 90% 活動を楽しめた。 95% 仲間づくりに役立った。 84% 新たな交流ができた。 55%
---	--

表Ⅲ-7-1 2年次②2016 「ホームデー準備」

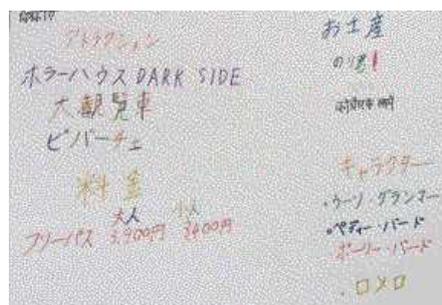
活動内容	①4・5人のグループをつくり、ホームデーに行くレオマワールドについて調べる。 ②そして調べた様々な情報をグループごとに画用紙にまとめ、できあがったものを教室に掲示する。
生徒の様子	パソコンやスマートフォンを使って、グルメやアトラクションなど各グループで興味のあるものを調べていた。また画用紙にまとめる作業もグループ内で分担し、こなしていた。
教員の評価	すべての作業で生徒が自主性を発揮することができた。また、自分たちで調べていくうちに、レオマワールドに行くことがすごく楽しみになっていた生徒もいた。



写真Ⅲ-13 生徒の様子

表Ⅲ-7-2 生徒の感想

活動への満足度	67点/100
積極的に参加できた。	77%
活動を楽しめた。	83%
仲間づくりに役立った。	70%
皆と協力できた。	91%
<ul style="list-style-type: none"> <li>・積極的に参加できてよかった。</li> <li>・仲間と協力できた。</li> <li>・一人一人が真剣に取り組めたから良かった。</li> <li>・何したらいいかわからんし、作業何していいかわかりやすくしてほしい。</li> <li>・ふざけすぎた。</li> </ul>	



写真Ⅲ-14 生徒の作品

### (3) 3年次

3年次は志望進路決定のための進路指導を兼ねて「自己PR素材集め」「面接対策」を実施した。卒業年次ということで、目前に迫った現実的な課題であることから前向きに取り組んでいる生徒が多かった。また、生徒の感想から、仲間と話し合いながらの活動を楽しみ、自分や友だちの良さについて考える機会になっていることがわかる。一方で、未だ課題のねらいを自分のなかで受け止めきれない生徒、課題に向き合うのが苦手な生徒、教員の指導や指示に素直に従えない生徒などが一部にいて、それが活動への満足度が低いことにつながっていると思われる。(表Ⅲ-8、表Ⅲ-9)

表Ⅲ-8-1 3年次①2016 「自己PR素材集め」

活動内容	進路部長より、自己PRに必要性について詳しく話を聞いたあと、シートを使って素材集めに入った。
生徒の様子	ほとんどの生徒が、自分が今から直面することなので、真剣に話を聞いていた。
教員の評価	ほとんどの生徒が真剣に取り組んでいたが、一部の生徒はクラスメートとの関係を拒否するような態度をとり、集団の中に入らなかった。



図Ⅲ-4 ワークシート

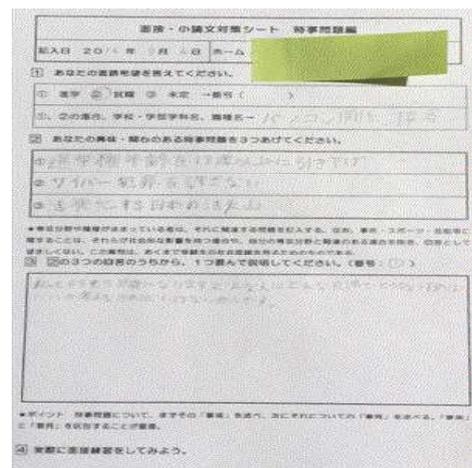
表Ⅲ-8-2 生徒の感想

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ふせんにいっぱい書いて、あは楽しかった。</li> <li>・なかなかおもしろい活動だった、またできたらいいな。</li> <li>・友達と話し合いながらの活動は結構好きです。</li> <li>・書けることと、書けないことがあったので嫌だった。</li> <li>・紙に書いて自分の考えが整理できた。</li> <li>・猛烈に感動している</li> <li>・はじめはわからなかったけど、やってみてとても良かった。</li> <li>・勉強だけでなく、人とのコミュニケーションが役に立つ。</li> <li>・進んで作業が自分なりにできたから。</li> <li>・自分がしていることや考えていることを振り返ることは大事だと思った</li> <li>・周りの人の一面を改めて認識できた積極的に参加できてよかった。</li> </ul>
---

活動への満足度	57点/100
積極的に参加できた。	71%
活動を楽しめた。	75%
仲間づくりに役立った。	73%
皆と協力できた。	64%

表Ⅲ-9-1 3年次②2016 「面接対策」

活動内容	進路部長より、面接・小論文時の時事問題の必要性について話を聞き、その後シートに記入していった。
生徒の様子	自己PR素材を参考に、積極的に先生に質問し、書類作成に真剣に取り組んだ。
教員の評価	ほとんどの生徒が真剣に取り組んでいたが、一部の生徒はクラスメートとの関係を拒否するような態度をとり、集団の中に入らなかった。



図Ⅲ-5 ワークシート

表Ⅲ-9-2 生徒の感想

<ul style="list-style-type: none"> <li>・またこの授業をしたい。</li> <li>・ちょっと疲れた。</li> <li>・あまりわからなかった。</li> <li>・今後のために必要なことがわかった。</li> <li>・これから必要なことを考えれたと思う。</li> <li>・あまり頭を使いたくなかった。</li> <li>・なかなか思いつかない事もあったけど、うまくまとめることができたので良かった。</li> <li>・全体的によくわからない。</li> <li>・勉強になることが多かった。</li> <li>・自分の武器になる。</li> </ul>
---

活動への満足度	54点/100
積極的に参加できた。	67%
活動を楽しめた。	59%
仲間づくりに役立った。	78%
皆と協力できた。	60%

### 3. LHR活動の実際（平成28年度、後期）

後期は、学園祭を盛会に成功させるだけでなく、そのプロセスにも留意し、生徒がさまざまなスキルの実践や確認の場でもあると位置づけてLHR活動の内容と学園祭を関連させるようにした。

学園祭は、年次の枠を払って縦割りで準備から当日の運営までを行うので、日ごろ親しい仲間同士という限られた範囲でのコミュニケーションが多い生徒たちにとって、学園祭での活動は社会性の大切さに生徒自身が気づき必要性を感じる場面が多い。また、学園祭は一般開放しているの、見知らぬ人とのコミュニケーションを学ぶ機会にもなっている。

学園祭の準備や運営は縦割りで行うため、頼んだり頼まれたりする機会がさまざまな場面が生じると思われるので、後期の1回目は縦割りという新たな集団でのコミュニケーションスキルということで「上手な頼み方・断り方」、2回目は模擬店での役割分担でのスキルということで「学園祭に向けて」というテーマで、1年次から3年次まで同じように実施した。

表Ⅲ-10は「上手な頼み方・断り方」の活動を実施した結果で、図Ⅲ-6はその際に使用したワークシートである。

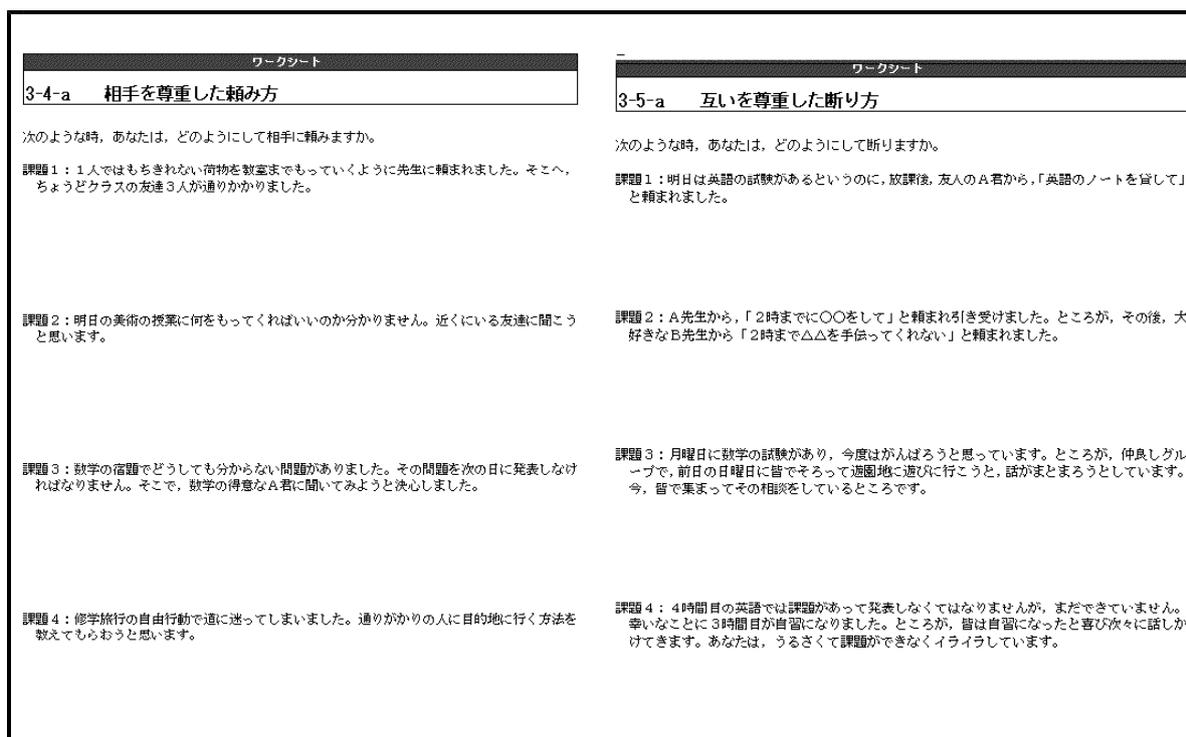
表Ⅲ-10-1 1年次③「上手な頼み方・断り方」

活動内容	①ワークシートで4パターンのシチュエーション問題を生徒に選択させ、対応の仕方を記入させ回収する。 ②生徒の案を利用し教員で良くない頼み方、上手な頼み方（断り方）を生徒の前で実演する。 ③その後、生徒も加わり実演後、感想を書く。
生徒の様子	初めはなかなか記入できない感じだったが、記入しだして話を始めると、全体的に活動しだした。生徒の案を実演しているときは、みんな注目して静かに見ていた。ところどころ、「ありえん」など、つつこみを入れながら、頼み方・断り方についてまじめに考えていたように思う。今までのホームの活動の中で、一番自然に活動できたようにおもう。案外、断るということをしない生徒が多いことがわかった。
教員の評価	文字を書くことに対して苦手な生徒が多い。 実際にはなかなか上手く友人関係をつくれな（相手の気持ちを考えることができない）生徒が多くいるため、こういった機会を何回か取り入れ、対応の仕方を学んで欲しい。

表Ⅲ-10-2 生徒の感想

1年次	2年次	3年次
<ul style="list-style-type: none"> <li>・断り方などは役立つと思うのでいい経験になった。</li> <li>・もう少しまじめにやってもよかったなあ。</li> <li>・すごく楽しかったし、勉強になった。</li> <li>・先生の寸劇は参考にはならなかったけど、わろうた。</li> <li>・改めて考えることができて、役に立ったと思う。</li> <li>・上手に頼むことを心がけようと思った。</li> <li>・人とかかわり方が知れてよかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頼みから話ができる人が増えたらいいなあ。</li> <li>・人によって態度を変えるのはきびしい。</li> <li>・少しめんどいと思ったけど、楽しかった。</li> <li>・現実にはありうらと思った。</li> <li>・相手への接し方は大事だと思う。</li> <li>・なんとなく使えるかな。</li> <li>・互いの意見が聞けてよかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頼み方・断り方、考えるのが難しかった。</li> <li>・いろいろな人から何かを頼まれたときに使うと思う。</li> <li>・楽しい要素がない。</li> <li>・たまにはこういう活動もいいかも。</li> <li>・人との会話がうまくなる。</li> <li>・自分だけでなく相手の意見や気持ちも分かってあげるのも勉強だし、自分のためにもなる</li> </ul>
活動への満足度 64点/100 積極的に参加できた。 72% 活動を楽しめた。 77% 今後に役立つか。 86% 皆と協力できた。 68%	活動への満足度 74点/100 積極的に参加できた。 81% 活動を楽しめた。 83% 今後に役立つか。 73% 皆と協力できた。 82%	活動への満足度 37点/100 積極的に参加できた。 43% 活動を楽しめた。 36% 今後に役立つか。 41% 皆と協力できた。 23%

2年次では、生徒の様子として「真剣に考えている生徒が多かった、指名をすると意見を寄せた」、教員の評価として「個人で考えることはできるが話し合いになると遠慮しているように感じた、実際に経験したことがある場面の例題であるともう少しイメージしやすいかもしれない」があげられた。3年次では、生徒の様子として「個人で書くときは真剣に書いていた、時間のある生徒は一つだけでなくいくつか書いていた、グループは静かな班・にぎやかな班に分かれていた」、教員の評価として「課題を考えるのに時間がかかったり取り掛かりが遅かったりする生徒もいた、グループ時で意見交換になると静かになり意見が出なかった、紙を回すことでなんとか他の生徒との交流ができた、いつも以上に静かで活発な意見交換になるにはどうすればいいのかが今後の課題だ」があげられた。



図Ⅲ－6 「上手な頼み方・断り方」で使用したワークシート

「上手な頼み方・断り方」のテーマは、より良いコミュニケーションを身につけるためには重要な課題だが、生徒が積極的に取り組みやすい、楽しみながらできる課題とは必ずしもいえない。生徒の生活に即した場面を取り入れたワークシートを工夫し、生徒の実態をふまえたモデリングやロールプレイなど活動の進め方を慎重に検討していく必要がある。

3年次の活動への満足度が低く、“考えるのが難しい”“楽しい要素がない”という生徒のコメントも、その難しさを示していると考えられる。また、3年次の特徴として、自分をみつめたりじっくり考えたりすることへの抵抗がある生徒が1・2年次に比べて多いという実態があるのも事実である。

図Ⅲ－7は「学園祭に向けて」で使用したアンケートであり、表Ⅲ－1 1はそのときの活動の結果である。1・2年次に比べて3年次の活動への評価が厳しい傾向がある。3年次の生徒は縦割りでの活動で上級生として“不安や大変さを感じている”ようすもうかがえる。1年次の生徒は“未だわからない所もあるが楽しみたい”、2年次の生徒は“昨年よりももっと楽しめるものにしたい”といった傾向が生徒の活動への評価や感想からうかがえる。

また、1年次の生徒の感想などから、アンケートやワークシートを準備することで生徒の活動を進めやすくすることができるが、その後に生徒が相互交流する活動の場を十分に確保しないと、生徒は活動にもの足りなさを感じたり、楽しさや達成感を感じにくいのではないかと考えることができる。

**共通LHR 「学園祭にむけて」アンケート**  
 ( ) ホーム 氏名 ( )

1. 学園祭に向けての活動（縦割りグループでの話し合いや作品作成・ホームでの模擬店の準備・前夜祭・当日の当番、体育館での発表等）で、必要になると思われることに○をつけてみよう。

- ・上手な頼み方 ・上手な断り方 ・相手の意見を聞く ・自分の意見を主張できる
- ・話したことの無い人と話ができる ・わからないことを質問できる ・協力する
- ・人前で自分を表現できる ・約束を守る ・時間を守る ・人のせいにならない
- ・悪口を言わない ・お客さんにあいさつをする ・お客さんに笑顔で対応する
- ・調理室でのまきりを守る ・買い物に行く ・けがなどしないよう注意する
- ・自分の役割に責任を持つ ・衛生面に気をつける ・楽しい雰囲気づくり
- ・計画をたてる ・わかりやすいポスターづくり ・リーダーシップをとる
- ・周囲の状況を考えた行動をとる ・困ってる人がいたら助ける ・元気に活動する
- ・その他

2. ①の中で、自分にとって得意な項目はなんですか？思い当たることを全て書いてみよう。  
 3. ①の中で、自分にとって苦手な項目はなんですか？思い当たることを全て書いてみよう。  
 4. ③について、どんな風に変えてみたいですか？  
 5. 周りの人と、よりよい学園祭の活動になるよう意見交換してみよう。

表Ⅲ－11 共通LHR「学園祭に向けて」生徒の感想

1年次	2年次	3年次
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分ができることはチャレンジしたい。</li> <li>・学園祭は成功させたい。</li> <li>・もっと意見出していこう。</li> <li>・アンケートばかりだった。</li> <li>・スムーズに進めるためにはこれ必要。</li> <li>・こういう活動はいいと思うよ。</li> <li>・学園祭の話し合いできてよかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の苦手がわかった。</li> <li>・初めての人と話す機会が増えるから。</li> <li>・自分の振り返りになった。</li> <li>・目標を決めました。</li> <li>・どうやればいいのか考えることができた。</li> <li>・積極的に動かないといけないと感じた。</li> <li>・みんなの絆が深まった気がする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当日は何がおこるかかわらん。</li> <li>・得意なものを選ぶのはいいと思った。</li> <li>・全員で楽しんで記憶に残る学園祭にしたい。</li> <li>・学園祭たいへんそう。</li> <li>・協力するのに必要な。</li> <li>・自分のためになる。</li> <li>・人との関りがあるから。</li> </ul>
活動への満足度 61点/100 積極的に参加できた。 70% 発見があった。 76% 仲間作りに役立った。 86% 皆と協力できた。 62%	活動への満足度 66点/100 積極的に参加できた。 81% 発見があった。 77% 仲間作りに役立った。 82% 皆と協力できた。 63%	活動への満足度 51点/100 積極的に参加できた。 66% 発見があった。 52% 仲間作りに役立った。 84% 皆と協力できた。 43%



写真Ⅲ－14 学園祭の様子(1)



写真Ⅲ－15 学園祭の様子(2)

表Ⅲ－１２は学園祭についての生徒と職員の感想である。

全体的には、生徒も学園祭を楽しみ有意義なものとしてとらえ、教員も肯定的な評価が多い。しかし、未だ自分から「何かやることない？」と聞ける生徒が少ない。でも、少しずつ自分の課題を乗り越える生徒の姿も見えてきたし、積極的に活動するようになった生徒も増えている。生徒が、互いにより影響を与えあえる関係性が築いていけるようなプログラムになれば、生徒自身にとって有意義なものになると思われる。

一方で、HR担任の工夫に頼る要素が大きく負担も多い。学年会や分掌会議等を開催して第三者の目線も活用する必要がある。生徒自身の目線に立ち、今関心があり、必要であろうテーマを取り上げ、活動自体が活発になるような工夫（仕掛け）も必要だと考える。

そして、もっとも重要なことは、学園祭の実施・運営に生徒がもっと主体的に関わり活動することによって、それぞれの生徒の成長が促進されるような工夫が求められる。

表Ⅲ－１２-1 「学園祭」生徒の感想

1年次	2年次	3年次
<ul style="list-style-type: none"> <li>先輩を手伝ってもらってうまくいった。</li> <li>イベント自体楽しかった。</li> <li>普段できないことができて楽しい。</li> <li>みんなと協力できたから。</li> <li>下準備の大切さを知った。</li> <li>人との関りが深くなった。</li> <li>知らない先輩と仲良くなった。</li> <li>接客がよい経験になった。</li> <li>試行錯誤してできたときは嬉しかった。</li> <li>最初はできないと思ってたけど、自分はできるんだと自信がついた。</li> <li>最後まであきらめずにやれてよかった。</li> <li>販売や調理の経験は役に立つ。</li> <li>作業は大変だったけど、積極的に参加できてよかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>準備の広告作り楽しかった。</li> <li>自分が成長できた。</li> <li>知らない人と話できた。</li> <li>人と関わられてよかった。</li> <li>忙しかったけど、最高の思い出ができた。</li> <li>どういうふうに手伝ったらいいかわかった。</li> <li>やりがいがあって、来年もしたい</li> <li>どうしたらいいか聞いてくれて心地よかった</li> <li>もう少しこえを出せたらよかった。</li> <li>キャーキャーいいながら楽しめた。</li> <li>自分からどうして欲しいか言えた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>みんなが本気でがんばっていた。</li> <li>自慢でそう思う。</li> <li>まわりを見て動けた・</li> <li>みんなと同じ目標に向けて協力できた。</li> <li>団体行動での役割分担の大切さを知れた。</li> <li>しっかり予定立ててやりたかった。</li> <li>もくもくと作業出来てよかった。</li> <li>お客さんたくさん来てくれてよかった。</li> <li>紙飛行機、よかった。</li> <li>みんなの歓声すごく嬉しかった。</li> <li>最高に楽しい一日でした。</li> </ul>
活動への満足度 68点/100 積極的に参加できた。 85% 楽しめた。 84% 仲間作りに役立った。 80% 皆と協力できた。 85%	活動への満足度 82点/100 積極的に参加できた。 85% 楽しめた。 86% 仲間作りに役立った。 78% 皆と協力できた。 73%	活動への満足度 68点/100 積極的に参加できた。 74% 楽しめた。 85% 仲間作りに役立った。 60% 皆と協力できた。 74%

表Ⅲ－12-2 「学園祭」教員の感想

<ul style="list-style-type: none"> <li>上級生が下級生に声をかけてやり方を教える場面が見られた。いろんな人と交流できる場面があることは生徒にとっていい機会になると思う。</li> <li>状況に応じて自分で判断して動ける生徒がいた。</li> <li>できていない班へは、できた班が自主的にフォローして完成させていた。助け合う力があってよい。</li> <li>相手に情報をきちんと最後まで伝える（説明できる）力がまだ備わっていない。</li> <li>（模擬店で）周りの生徒が認め、励ましているシーンが見られた。</li> <li>それぞれの生徒が自分の得意なところ活かして、それが他者から認められる、よい体験になっている。</li> <li>他者理解や自分の行った事が認められるという自己受容が形成されていく姿が見られた。</li> <li>自分から「何かやることない？」と聞ける生徒が少ない</li> </ul>
--

#### 4. LHR活動の実際（平成29年度、前期）

平成29年度の新入生には、入学式の翌日に「仲間づくり」としてプロジェクトアドベンチャー（PA）の活動を実施した。事前に、関係する全職員で活動内容や動きを確認した。実際の活動では、ファシリテーターとなる教員、それ以外の教員は全てサブのファシリテーターとして動いた。途中で見学にまわる生徒もいたが、それにも教員がかかわりサポートし、最後の活動では全ての生徒が参加できた。

全体として活動が統率され、参加した生徒の表情も生き生きとして仲間づくりの効果は高かった。生徒の活動への満足度も高かった。入学直後の緊張感もあると思われるが、多くの生徒が不登校や別室登校、対人関係の課題などを抱えているなかで、70名を超える生徒が全体として統率の取れた行動ができたことはすばらしいことだと考える。これまでだと、このような活動をしようとする体育館の壁に張り付いて動かなかったり、指示が通らなかつたりしたこともある。活動内容やファシリテートの仕方を工夫すれば学年全体としてまとまりのある活動ができることがわかった意義は大きい。これは、本校に入学してくる生徒の質がここ数年変化してきているとも考えられる。生徒の実態と、それにフィットするような活動を絶えず模索していく必要がある。

表Ⅲ-13は、「仲間づくり（PA）」に参加した新入生のようすである。

表Ⅲ-13-1 1年次①2017「仲間づくり（PA）」

活動内容	①仲間探し ②スプーンリレー ③風船パス ④パイプライン ⑤振り返り ※ 場所：体育館
生徒の様子	①と②では様子見の状態の場面が多かったが、③④は自分が動かないと風船が、ボールが後につながらないので、積極的に参加できたと思う。特に④は、ボールが落ちないように、それぞれが意見を出し合い、作戦を練る場面がみられた。
教員の評価	活動が進むにつれ、意見や生徒の動きが活発になってきてよかったと思う。④の場面では、協力しあっている場面が見ることができ、今後のホーム活動にも参考になった。全員が参加することが。「久しぶりに動いた」という生徒が数人おり、動く活動を行ってよかったと思う。



写真Ⅲ-16 PAのようす(1)



写真Ⅲ-17 PAのようす(2)

表Ⅲ-13-2 生徒の感想

皆がどれだけ協力できるかが試されたので、これから役立つと思った。色んな人と仲良くなれた。コミュニケーションをとる大事さが良くわかった。久しぶりに運動っぽいことした。名前を覚えるきっかけになった。新しい仲間ができた。1人で遊ぶよりやっぱり仲間と色々な行事が出来た事が嬉しかった。話した事がない人と話せてけっこううれしかった〜♪。ゆるくてすき。	活動への満足度 72点/100 積極的に参加できた。 82% 活動を楽しめた。 82% 学校に慣れるのに役立った。 81% 皆と協力できた。 84%
--	--

表Ⅲ-14は「私の気持ち」と表Ⅲ-15「みんなを知ろう」のテーマで、1年次に実施した活動の結果である。活動への満足度は、「私の気持ち」が61点、「みんなを知ろう」が71点と、「みんなを知ろう」の活動への生徒の満足度が高い。また、生徒の感想からも「みんなを知ろう」の方が評判がよく、「私の気持ち」は否定的というか懐疑的な感想もみられる。これは「私

の気持ち」ではワークシートに自分の気持ちを書いていくというもので仲間とかかわる活動が少なかったこと、「みんなを知ろう」では、グループでカードに書いてある質問に順に答えていくというコミュニケーションゲームであったことによると考えられる。

表Ⅲ－１４ １年次①2017 「私の気持ち」

・何をしたかったのかよくわからない。	活動への満足度	61点/100
・自分のことについて考えることができた。	積極的に参加できた。	88%
・紙に書いたら、ひとの気持ちはわからない。	活動を楽しめた。	72%
・今回は一人でやったけど、次回は友人とやってみようと思った。	学校に慣れるのに役立った。	31%
	皆と協力ができた。	65%

表Ⅲ－１５ １年次①2017 「みんなを知ろう」

・むっちゃ盛り上がった。	活動への満足度	71点/100
・普段話せない人と話せた。	積極的に参加できた。	88%
・いつもいる仲間と話してみても意外と知らないことあって聞いて楽しかった。	活動を楽しめた。	80%
・さらに仲良くなれそうなので、またこんな活動したい。	学校に慣れるのに役立った。	40%
	皆と協力ができた。	－%

このLHRでの2年間の取り組みを振り返ってみると、生徒は対人関係に課題を抱えながらも仲間との交流が促進されるような活動を求めているし、そのような活動の方が活動への満足度が高い傾向がある。

これから、楽しさや面白さを含みながらコミュニケーションを促進するような活動を考え、必要なワークシートや資料を整備していくことが必要だと考える。

## 5. 成果と課題

### (1) 成果

さまざまな課題や特性を抱える生徒達が同じクラスにいる状況で、仲間づくりやコミュニケーションスキル、ライフスキルなどの心理教育を、LHR活動として取り組むことへの不安や、生徒がさらに混乱するのではないだろうかとの危惧もあったが、テーマの設定や活動の進め方、ワークシートなどを工夫すれば何とか実施できることを確認できた。また、その必要性を受け止めている生徒もいることがわかった。

さらに、ここ数年で生徒の質が変化してきていることも強く感じられた。

### (2) 課題

これからの課題として、次のようなことが挙げられる。

- ・生徒に身につけさせたい社会性とは何か、スキルとは何かを具体的にし、そのテーマに基づいて生徒が活動しやすい進め方やワークシートを検討していくこと。
- ・LHR活動での学びが学校行事のなかでより活かされるようにすること。
- ・個から小グループ、そしてクラス単位と、段階的に活動を仕組んでいくこと。
- ・生徒が楽しさやおもしろさを感じながら、生徒相互のコミュニケーションが促進されるような活動を検討していくこと。
- ・生徒のLHR活動への積極的な参加をより促すこと。

## 第4節① 社会性の育成（個人）～ コミュニケーション講座

学校のなかで、日常のあいさつや友だちとの何気ないおしゃべりにも、緊張したり何を話したら良いのかわからないで立ちすくんだりしている生徒も見受けられる。そのような生徒を対象に「コミュニケーション講座」を実施した。この講座は、授業ではないので単位の認定にはつながらないことを確認した。

### 1. 自主講座「コミュニケーション」の目的と実施方法

実施目的を次のようにした。

- (1) 人を信頼することやコミュニケーションの苦手な生徒に話し方や聞き方、あいさつの仕方などのスキル・トレーニングを実施することにより、その改善を図る。
- (2) スキル・トレーニングを通して、生徒の自己肯定感や自己効力感を育む。

対象は希望者としたが、職員からみてスキル・トレーニングが必要だと思われる生徒には参加を促すための声かけも個別に行った。

基本的には、次のような実施方法で行った。

- (1) 各回は50分程度とする。
- (2) 年間10回程度の実施を目安とする。
- (3) 希望者が一人でもいれば実施する。
- (4) 各回のテーマと内容は、教育相談コーディネーター（以下、教育相談C○）とSSWで協議して決める。
- (5) 各回の実施日時やテーマは、事前にポスター掲示で生徒に周知する。
- (6) 教育相談C○とSSWの二人がファシリテーター（以下、FA）となって行う。

### 2. 自主講座「コミュニケーション」の実際

表Ⅲ－16が平成28年度に実施した講座の内容である。

講座の実施日時を決めると、図Ⅲ－8のようなポスターを作成し、生徒への連絡掲示板や教室への掲示を行い生徒に周知を図った。また、職員連絡会でも、生徒への講座開催の知らせと、気になる生徒への声かけを依頼した。

各回の講座の流れは、基本的には表Ⅲ－17のように、ウォーミング・アップ、演習、ふりかえりの流れで実施した。毎回、講座のテーマに合わせた資料や演習シートを準備して、それを使いながら講座を進めた。（図Ⅲ－9）

自主講座  
だい かい  
「コミュニケーション」(第1回)  
さんかしゃぼしゅう  
参加者募集！  
ひと きらく はな かに わだい はな  
「人と気楽に話せない」、「何を話題にして話していいかわからない」  
とも はな 話していても、心のどこかで何か不安を抱えている  
こんなことを感じている人はいませんか？  
コミュニケーション講座では、  
ひと ひとの関わり方や話し方・聞き方などについて  
じっさい 体験しながら学んでいこうと計画しています。  
第1回 『お互いを知ろう①～自分を表現しよう～』  
☆日時:平成29年5月16日(火) 15:00～16:00  
☆場所:103教室  
☆担当者:〇〇, 〇〇  
参加希望者は、15日(月)までに〇〇もしくは〇〇に連絡してください。  
\*この講座は、年間10回程度、実施する予定です。

図Ⅲ－8 講座案内の掲示物

表Ⅲ－１６ 平成２８年度 コミュニケーション講座 テーマの内容

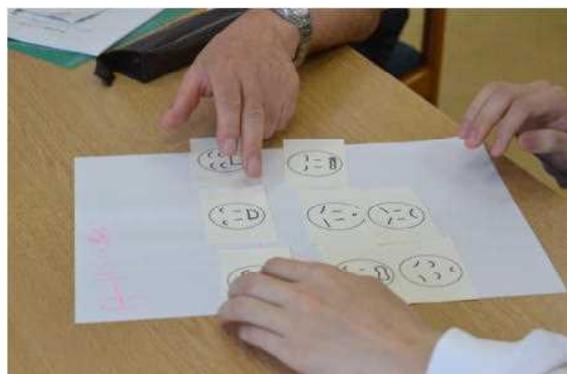
回	実施日	テーマ
1	5月26日(木)	互いを知ろう!
2	6月16日(木)	コミュニケーションとは(双方向、できごとと気持ち)
3	6月23日(木)	あいさつ(ことばかけ、距離)
4	7月5日(火)	会話を継続させる話題とは①
5	7月12日(火)	会話を継続させる話題とは②
6	10月6日(木)	質問の仕方〔オープン・クエスチョン〕
7	10月13日(木)	会話を楽しむ
8	11月10日(木)	頼み方・断り方
9	12月8日(木)	リラクゼーション
10	1月12日(木)	仲間の良さを引き出す

表Ⅲ－１７ 講座の流れ

相手との距離と、あいさつ	
1.	ウォーミング・アップ
2.	“私”のまわりにいる人 ☆ “私”と相手との関係性によって、 話す内容や相手との距離に配慮することが大切 ☆ こころの距離と実際の距離(イメージ) ☆ 個人空間(Personal Space)について学ぶ ‘自分がどうか’だけでなく、 ‘相手がどう受け取るか’も大切なこと
3.	あいさつ (1) あいさつするときの基本パターンを確認する (2) 実際に相手との関係をイメージしながら、あいさつのロールプレイをする 個人空間の確認、苦手な相手でもあいさつをする
4.	話しかけ (1) 演習シートを使って、話しかけのことばをつくる。 (2) それを基に、ロールプレイをする。
5.	ふりかえり (1) 今日の感想を出し合う (2) ふりかえりシートへの記入



写真Ⅲ－１９ 講座風景(1)



写真Ⅲ－２０ 講座風景(2)

### 3. 自主講座「コミュニケーション」の結果

それぞれの講座の終わりに、ふりかえり用紙を準備して講座の感想の記入を求めた。

表Ⅲ－18は、参加者の講座内容に対する満足度を100点法で表現を求めたものの平均値である。また、参加者の感想として次のような内容があった。『始める前は不安だったが楽しかった。話の内容だけでなく、表情・声の大きさ・トーンなどで伝えたいことが分かったり伝えたりできることが分かった。距離について考えるのが難しかった。何を話題にすればいいのか分かった。今の自分ならいろいろな話題を人にふることができると思ったので少し嬉しかった。自分の意見を積極的に言えたのは良かった。』参加者が少ないため、これらの数値や感想から講座の成果を評価するのは難しいが、参加者からは肯定的な感想が多く否定的なものはなかった。

コミュニケーション

誰かに話しかけてみよう

学校のなかで、友だちや先生に話しかける練習をしてみましょう。  
次のパターンで、話しかけることを考えてみましょう。そして、それを使ってペアになり実際にやってみましょう。

1. 【あいさつ + 天気】 「おはようございます。今日は暑いですね。」
2. 【あいさつ + 学習、部活】 「おはよう、今日、部活あったっけ？」
3. 【あいさつ + ほめる】 「おはよう。今日の服、ステキね。」
4. 【あいさつ + 身の周りの話題】 「おはよう。1時間目は何だった？」  
「こんにちは。今日、〇〇さん、学校来てる？」  
「こんにちは。今日はお昼から雨が降りそうだけど、傘、持ってきた？」
5. 【あいさつ + 共通の話題】 「こんにちは。イラスト、できた？」  
「こんにちは。今日、よきこいの練習、どうする？」
6. 【あいさつ + 相手のことを聞く】 「こんにちは。体調（バイト）はどう？」
7. 【あいさつ + 情報を得る】 「こんにちは。〇〇の発売って、いつだったっけ？」

※ 何度も練習して、スムーズに声が出て、話しかけられるようになりましょう。  
表情や声の大きさ、声の調子などについても気をつけましょう。

図Ⅲ－9 演習用資料の例

表Ⅲ－18 参加者の講座内容に対する満足度の平均値

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回
参加者数	5名	2名	2名	3名	2名	2名	2名	4名	2名	2名
満足度	64.0	75.0	55.0	66.7	60.0	90.0	90.0	72.5	82.5	87.5

生徒Aは、年間10回の講座を全て受講した生徒である。

生徒Aは、入学当初から周囲の人と殆ど話すことがなく、体の緊張を感じさせ、こだわりも強い傾向があった。表Ⅲ－19は、生徒Aの10回のふりかえりをまとめたものである。

初回の講座では、とても緊張しているのを感じさせ、話すときも顔を背けて他の参加者を見ることはなかった。3回目くらいまでは緊張が見られたが、その後は徐々に緊張も緩んできて顔を上げ相手を見て話すようになってきた。講座の後半になってくると、自ら話しかけることもできるようになってきた。まだ、話し方に少し堅さがみられるが、話の流れのなかで自ら質問したり話題を振ったりする場面もみられるようになった。さらに、講座外でも、学校のなかで出会ったときに、SSWや教育相談C oとの会話が续くようになった。

生徒Aの年間を通した感想として、「コミュニケーション講座を通して、人ともっとかかわ

りたいと思うようになり、充実した生活がおくれた。」「参加者が少なかったので、さびしかった。」「参加者が多くても…しゃべれなかったら、意味ないけど…」「人に質問をしていって自分も答える、というのはよかったので、これからも継続して行って欲しい。」「悪いことは、一つもなかった。」などが語られた。

表Ⅲ－１９ 生徒Aの各回に参加しての評価

回	テーマ	満足度	積極的	協力	楽しい	役立つ	
1	互いを知ろう！	70	++	+	+	+	1. 講座の満足度は(100点法)
2	コミュニケーションとは	70	-	++	-	+	2. 積極的に参加できたか
3	あいさつと距離	60	+	+	+	+	3. 協力できたか
4	会話を継続させる①	80	+	++	+	++	4. 楽しめたか
5	会話を継続させる②	80	++	++	+	++	5. 役に立つと思うか
6	質問の仕方	80	+	+	+	+	
7	会話を楽しむ	80	+	+	+	+	++：できた、思う
8	頼み方・断り方	70	+	+	+	++	＋：まあまあ
9	リラクセーション	70	+	+	+	+	－：あまり
10	仲間の良さを引き出す	75	+	+	+	++	――：できなかった、思わない
	全体を振り返って	75	++	+	+	++	

#### 4. 自主講座「コミュニケーション」の成果と課題

##### (1) 講座に対する成果と課題

成果としては、次のようなことが挙げられる。講座に参加した生徒からは肯定的な評価がほとんどであった。また、参加者が少なかったこともあり、参加者の課題に応じた内容で実施できた。継続して参加した生徒には、それなりの成長がうかがわれた。

課題としては、次のようなことが挙げられる。コミュニケーションがうまくとれなくて戸惑っている生徒は多いのだが、実際の参加者は少なかった。職員や生徒への実施日と内容の周知の方法や、実施日と時間帯などを検討していく必要がある。また、より生徒の課題に応じたテーマや内容の検討を常に行っていくことが求められる。

##### (2) SSWと教育相談C○の協働についての成果と課題

成果としては、次のようなことが挙げられる。SSWと教育相談C○が共に学校に常駐しているため、課題を共有しやすい。参加生徒の学校生活でのようすを実際に見て、そこからの現実的な課題を講座のテーマとして実施できた。共に校内にいるため日常の学校生活のなかで講座内容をスキルの練習と定着に向けて参加生徒の学校生活へつなぐことができた。

課題としては、次のようなことが挙げられる。SSWと教育相談C○の活動や講座内容などを教職員にさらに理解を求め協力を得る事が求められる。ファシリテートの仕方或使用する資料や用具などについて絶えず意見交換や確認をすることが大切である。

※ 平成29年度は、前年度とファシリテートの役割を交代してメインをSSW、サブを教育相談C○が行い実施した。

## 第4節② 社会性の育成（個人）～ 太平洋キッチン

今まで学習や人間関係スキルについては生徒に合った教材の作成や補習、コミュニケーション講座等を積極的に設定しサポートを行ってきた。それらの活動に参加する生徒の多くは比較的卒業後の進路も早い段階で考えやすく、その後も定着ができて見えるように見える。学習や人間関係スキルについての課題解決の支援の結果は見受けられるが、最低限の生活能力の課題や支援については検討や実践がなかなかされなかった。学校や教員が家庭へ踏み込むことの躊躇や各家庭の個人的な部分への介入の困難さがあった。しかし様々な理由から最低限の生活が安定しない家庭や、自立の際に生活スキルがなく困ってしまう生徒は存在する。何か支援できることはないかと検討し、家庭への介入は難しいが自立のために生徒へ生活スキルの支援することは可能ではないかと考えるようになった。卒業後の自立も、今現在家庭等が課題を抱えている生徒へも支援ができる活動が必要と感じ、今回の調理体験活動へと繋がった。

### 2. 活動の目的

学習や人間関係スキルについては今まで行ってきた本校の様々な活動が充実しているが、ここでは生徒の家庭の役割について焦点を当て、何が必要かを検討した。卒業生や在校生、その保護者等可能な限り聞き取りを行ったところ、課題として明らかになったのは食生活の不安定さであった。自炊の習慣が無かったとしてもスーパーやコンビニエンスストア等で買ってきて食べることや、1日に三食をだいたい決まった時間に食べるという習慣ではないことは想像がついていた。しかし、実際聞き取りをしていくと、考えていたよりも課題が広範囲ということが分かった。例としては、経済的に困窮していてそもそも食べるものが家に無いといった家庭、一人親世帯で仕事の時間が長く家に居ないことが多いため、保護者等が食事を作ることができないなどがあった。各家庭や保護者の事情は多岐にわたるため、それら一つ一つを学校で対応し支援することは難しい。その中でも我々教員ができることは何か考えた時、生徒たちがこの学校を卒業した時に生きていく力をつける手助けをするということだった。食生活の中で学校が支援できることは何かを検討したところ、最低限1日の中で一食でもお腹いっぱいにご飯を食べることができるような知識や技術を教えていくことだった。基本的な自炊や限られた金額で材料調達ができる力をつけることが重要である。そのためにどのようなことが具体的にできるのか検討・活動していくことが本研究の目的である。学校の中で自立支援プログラムの一つと位置付け、今回実践する調理体験活動を「太平洋キッチン」と名付けスタートした。

### 3. 実践方法

生徒の食生活の実情や家庭状況については、入学時に中学校等の関係機関からの引き継いだ資料を基に生徒本人との日常の会話からの聞き取りを行い把握していった。インタビューや用紙を使っての調査となると、家庭等の極めて個人的な部分への質問となってしまう嫌悪感を与えたりして実情が見えなくなってしまうと考え、日常的な会話の中から食事と家庭事情について聞き取るようにした。支援対象の生徒の確定は教員側で行った。情報を基に必要性の高い生

徒を判断し、担任・副担任や教育相談係等から声をかけるようにした。原則として参加生徒の人数を10名程度と少なめに設定し、活動中全員に支援が行えるように心がけた。実践内容は、①献立の作成、②材料調達、③調理、④実食・振り返り、⑤片付けという流れだった。詳細については次項に記載する。なお、考察方法は基本的には実食中に振り返りをしている際に聞き取ることと、年度末に質問用紙を準備し記入してもらうことにした。実践した調理体験等が生徒たちにとってどんなものになったか、その後の生活に取り入れられ家庭にとってプラスの支援となるか卒業後に自立した時に使えるものなのかが重要だった。

#### 4. 実践

参加生徒は家庭事情等を考慮し、支援が必要だと考えられる生徒へ個別に声をかけていることや、本当に必要な生徒に参加して欲しいということがあったため、通常授業日は避け祝日や代休日などの本来生徒の登校日ではない日を選んで設定した。それぞれの具体的な内容としてメニューと参加生徒の数を年度別に表Ⅲ－20と表3－21に示している。

##### ① 献立の作成

始めは「安い・簡単・お腹一杯になる」を目標に教員が考え生徒へ提案していた。回数を重ねるごとに生徒へ今後何を作ってみたいか、作れるようになりたいかを聞き、可能な範囲で献立に取り入れていった。

表Ⅲ－20 平成28年度の実施内容

実施日	メニュー	参加生徒数
9/28(水)	ご飯・みそ汁・玉子焼き	4人
10/11(火)	ご飯・豚汁・和え物	6人
11/29(火)	パスタ	1人
12/19(月)	ご飯・みそ汁・豚の生姜焼き	1人
12/28(水)	太平洋キッチンバイキング	4人

表Ⅲ－21 平成29年度の実施内容

実施日	メニュー	参加生徒数
4/7(金)	ご飯・みそ汁・玉子焼き・ にんじんしりしり	4人
5/15(月)	ご飯・玉子スープ・餃子・ 春雨サラダ	3人
6/5(月)	ご飯・コンソメスープ・ 豚バラくるくるステーキ・カプレーゼ	5人
7/28(金)	具だくさんそうめん・ポテトサラダ	5人
8/4(金)	夏野菜オイルパスタ・コンソメスープ・ サラダ	5人
9/12(火)	夏野菜カレー・梨リンゴサラダ・ スイートポテト	5人



写真Ⅲ－21 調理の様子



写真Ⅲ－22 できあがった料理

## ② 材料調達

平成28年度9月（初回）と平成29年度7月（期末考査日）の回以外は、学校近くのスーパーへ生徒と一緒に向かい生徒が食材を選び購入する形にした。スーパーへ行く前に学校で献立を見ながら何がどのくらい必要か相談をし、どれが学校にはあり不足しているものは何か判断させるようにした。初回ではあらかじめ教員が材料を準備し、「これで何円だったと思う？」と質問し、生徒の金銭感覚等がどんなものか探ってみた。すると、「卵1パックが500円」「ねぎ1袋で300円」「全然分からない」「全部で1万円くらいかな」等大幅に高額な予想をする生徒が多く現実とはかけ離れた感覚がほとんどだった。

## ③ 調理

ご飯を炊いたことがない、包丁を持ったことがない、火をつけた（扱った）ことがない、生肉や野菜を触ったことがない等々経験が希薄な生徒がほとんどだった。経験がないことやできないことを恥ずかしいと感じる生徒も多かったが、そんな自分も受け入れられるような声掛けも行った。そしてできるようになったことにはきちんとことばで伝え一緒に喜ぶようにした。レシピは毎回必要な材料や工程順が分かるように作成し一人ひとりに配布した。調理中に逐一教員が指示するのではなく、レシピを見ながらできる様な声かけや、家に持ち帰った時に1人でもできるレシピの作成を心掛けた。

図Ⅲ-10は実際に生徒へ配布しているレシピの用紙である。

9月12日(火)

太平洋キッチン メニュー

\*夏野菜カレー \*梨サラダ \*スイートポテト

【準備する材料(2~3人分)】

\*夏野菜カレー  
・たまねぎ(1個) ・じゃがいも(1~2個) ・にんじん(1/2~1本) ・ひき肉(150g程度)  
・なす、オクラ、トマトなど好みの夏野菜 ・ワインナー(お好み) ・カレールウ(1/2箱)・油

\*梨サラダ  
・りんご(1個) ・梨(1個) ・きゅうり(2~3本) ・マヨネーズ ・塩(少々)

\*スイートポテト  
・さつまいも(1~2本) ・砂糖(少々) ・牛乳か生クリーム(適量) ・バターかマーガリン(少々)  
・卵黄(1個分)

【作り方】

\*夏野菜カレー  
①野菜をそれぞれ食べやすい大きさに切る(大きめに切っても美味しい!)。  
⇒切り方によってしょっかんが違ってくる野菜もあるのていろいろ試してみてもたのしい!  
②野菜、ひき肉を炒める。(炒めないパターンもあるよ!)  
③カレールウの箱に書いてある水の量ははかって鍋に入れる。炒めた材料も一緒に煮込む。  
④材料に火が通ったら、カレールウを入れて溶かす。十分にとけたら完成!

\*梨サラダ  
①りんごと梨をそれぞれ食べやすい大きさに切る。  
②きゅうりをうすい輪切りにして、少し塩をして置いておく。(水分がたき出できます。)  
③きゅうりの水分を手でしぼってボウルに入れる。  
④③に①を入れて、マヨネーズを入れて混ぜたら完成!

\*スイートポテト  
①さつまいもを洗ってラップで包んで電子レンジで柔らかくする。  
②さつまいもをできるだけこまかくつぶす。(温かいうちにつぶせるように!熱いので気をつけて!)  
③好みに砂糖を入れ、牛乳やバターなどを入れてなめらかにする。  
④形を整えて表面に卵黄をぬって、オープン(トースター)へ!  
⑤表面に焦げ目がついたらできあがり!

かくし味で色々なものがカレーには合う!試してみても美味しい(^\_^)

図Ⅲ-10 生徒に配布するメニュー用紙

## ④ 実食

自分たちで完成させた料理をそれぞれが配膳し、参加生徒・教員皆で食べる。担当の教員以外でも参加生徒の担任や、普段関わっている教員や事務職員に分けたりする生徒もいた。ただし、衛生面の観点から作ったものを持ち帰ることは禁止とした。参加生徒や教員全員の顔が見えるよう1つの机を囲むように座った。近年問題となっている「孤食」についても検討し「誰かと顔を合わせ他愛もない話をしながら食べるご飯」を意識しながら食事ができるようにした。ここで作ってみた感想や家庭で実践できたかどうか、今後も参加していきたいか等ふり返りも含め会話をしながら食事をした。

## ⑤ 片付け

大まかには調理中に片付けたりするが、食べた後の食器や調理室の清掃は生徒が中心となて行う。これも普段、調理器具や食器を使う習慣のない生徒にとっては重要な実践の一部となった。

## 5. 活動の結果と今後の展開について

参加した生徒からは「とても楽しかった」「うまくできた時は嬉しかった」「初めての料理で緊張した」等の声が聞けた。平成28年度は参加者が疎らで継続して参加できる生徒も少なかったが、回を重ね平成29年度になってからは継続参加ができる生徒も増えた。その中には「前にここで作ったポテトサラダを家でもつくってみた」「家でご飯炊いてみた」等実際に家で繰り返し作っている生徒や、卒業後に向けて参加するなど生徒たちも目的意識を持っていることが分かってきた。

買い物や調理技術等目に見える力以外にもそれぞれの気持ちや学校生活、同年代との関わり方にも影響を及ぼしているような場面が垣間見られるようになった。ある男子生徒は、今まで自分から周りの人へ声をかけたり、困った時に自分から助けを求めることがなかなかできなかった。本人もそのような自分の課題と向き合うことができていたが、解決することができなかった。しかし、今回太平洋キッチンの活動中に困った場面やできたことに対して自ら発言するようになった。教員や同年代と気持ちや作業を共有することが彼にとって大きな変化となったようだった。ある女子生徒は家庭がとても複雑で家では本人も自炊ができず、ご飯をつくってもらったり誰かと食べる経験がほとんど無かったと言っていた。この活動に参加し卒業時には「人と料理をして皆で食べるのは楽しかった。うまく作れたときは嬉しかった。」と感想を記入してくれた。

平成28年12月には「太平洋キッチンバイキング」を開催し、今まで作った料理のほとんどの種類を全員の教員に振る舞う企画も行った。教員と調理をした生徒と同じ机でご飯を食べ、教員も生徒の成長を感じるととても良い機会となり、生徒たちも達成感や充実感を口にしていた。

今後の「太平洋キッチン」の活動で新たに組み込んでいきたいこととしては、プランター等で簡単に育てることができる季節の野菜等の栽培活動を検討している。自分で作って収穫し食べるという食育の一環として取り入れていければと思っている。また、今まで材料調達の際に極力実生活に近い値段の商品を選べられる声かけ等は意識していたが、買い物全体の金額指定はしてこなかった。総額でいくらまでなら大丈夫、手持ちがどれくらいあるかによって選ぶ商品は変わってくる。現実的で時々状況に合った金銭感覚も養っていくことができればと考えている。

今後も自立支援プログラムの一環として「太平洋キッチン」を継続していく必要性を強く感じる。今ある課題としては、担任・副担任や教育相談係からもう少し生徒の状況を詳しく聞き取り、本当に活動が必要な生徒は誰なのか確認することである。現在ももちろん自立するためにこの体験が必要な生徒が参加できているが、本校にはもっと必要性の高い生徒が居ることも事実である。そのような生徒の中には、学校に登校すること自体が難しい状況にある者もいる。この活動をきっかけに学校に登校したり家の外へ出ることができるようになれば、よりこの活動が自立支援プログラムとしての意味を果たすのではないかと考える。

基本的な食事の習慣や家事の手伝い等で自炊を覚えていくこと、誰かと食事をする楽しさは、家庭等で経験することが望ましい。しかし、様々な事情でそれが困難な場合もある。家庭で経験ができなかったからといって、その経験の全てを学校で補っていくこともまた難しい。しかし、社会に近い高等学校であるからこそ、ある程度の自立をするための力をつける支援をしていく必要がある。特に本校には、支援を必要とする生徒が多くいる。そのような生徒

たちが実際に生きていくための力はどんなものなのかを考え、実生活に近い形で実践していくことが重要だと考える。卒業後の自立のための力も、今日明日のための生きていく力も支援していきたいと強く思う。